
どうやら、いじめられっ子の魔王が俺と世界征服したいそうです。new

水面

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

どうやら、いじめられっ子の魔王が俺と世界征服したいそうです。

new

【ノード】

N4202Y

【作者名】

水面

【あらすじ】

勇者の末裔である《東條信弥》は、偶然にも魔王を現代へ召喚してしまった！

でもこの魔王様、いじめられて?ずいぶんと内氣で残念な性格になってしまったようです。

勇者に対して全幅の信頼を置く魔王《咲耶》は勇者《信弥》にべつたり。

そんな彼女の目標は世界征服！

でもなぜかボランティア部に入ることに。

世界の征服も人助けから？！

ギャグありシリアスありの口リツ子魔王奮闘記！！

の書き直し。

プロローグ（前書き）

魔王が封臣をねでいたらしき

プロローグ

学校の怪談。

どいつも同じような、ショッぱい話がいくつかある不思議なアレだ。

もちろんこの俺 東條信弥とうじょうのぶしやが通つている学園にもある。

トイレにいらっしゃるの方。

走る模型。

目を光らせたり、勝手にピアノを弾く音楽室の偉人。

その中でも、とある変わった話がある。

学園の裏手に生えてる大桜。

四～五人の手をつないで、ようやく囲める樹幹。

遙かに見上げる、その高さ。

春には花びらを涼風に乗せて、空と地上を桃色に彩る。

その大桜には……、

どうこう訳だか、魔王が封印されていたらし。

何かが憑いててもおかしくないほどの立派な大木だと思うが、学校の怪談くらいで魔王様がしゃしゃりで もと、こいつしゃなるなんて安売りはやめたほうがいいと思つ。

この大桜の満開を見上げるのは、今年で三度目になる。

「のお信弥、わらわはお腹が減つたぞ。いつまで桜を見上げておるのだ」

「その封印されていたらしい？ 魔王様が制服の袖を引っ張りながら訴えてきた。

「そうだな、帰つて美弥が作ってくれる晩飯を食べようか。今日は咲耶やくやが好きな鳥トリのから揚げりしきぞ？」

「本当か！ もう～美弥めえ～。わらわの～機嫌取りとは、愛うい奴やつめ」

すこじぶる嬉しそうだ。

俺と咲耶はしつかりと手をつないで、歩き出した。

現世あշেは変わらない。

プロローグ（後書き）

どこが面白かった、面白くなかった。
些細なことでもかまいませんので、感想をいただけると嬉しいです。

出番い（前書き）

美弥が垣間見たものとはなんだつたのだね？

出会い

午前中のイベントである春の式典が終わった。

俺はあの桜へと来ていた。

手近なベンチへと座る。

見上げると、桜の花びらが舞い散る。

大きく広がった見事な枝が桜の花をいくらでも咲かせていた。

咲き乱れる桜を見にくるような雅な趣味でも、見ず知らずの女の子からの手紙で呼びだされる程もてる男でもない俺だが。

視界の向いからこちらに駆けてくる女の子が一人。

本日めでたくこの東武学園に入学した、妹である東條美弥だ。

俺なんかにはもつたいたいくらい、よく出来た妹である。

ベンチから立ち上がり美弥を迎えた。

そばまで駆けよつてくる。

肩に舞散る桜と同じピンク色に頬を上気させながら、申し訳なさそうに囁く。

「二、兄さん……、遅れて……、『めんなさい』

「そんなに急がなくてもよかつたのに」

「だ、だつてせつかく兄さんが学校を案内してくれるんです。でも、
ここに来るときに少し迷つてしまつて……」

「やつぱり昇降口あたりで待ち合わせたほうが良かつたんじやない
かな」

「いいんです。こりうのもデートの待ち合わせみたいで新鮮でし
たよ。それで、これが桜の大樹ですね。すつごく素敵です」

美弥につられて視線を移すと、咲き乱れる桜花と青い空のコントラ
ストがまぶしい。

春風に舞い踊る花びらが、ここではない違う世界へと誘つているか
のようだつた。

「くしゅん」

かわいいくしゃみが聞こえた。

初春の冷たい風が美弥の汗と一緒に体温も風に乗せていつたのだろう。

「美弥、大丈夫？」

「大丈夫ですよ兄さん。でも、久しぶりに撫でてほしいです。いい
……ですよね？」

よく出来た妹はときどきいつて兄に甘えてくる。

「こんな風におねだりされて、断ることが出来る兄はいないだらう。

もし居るならば、そいつには兄の兄たる資格などありはしない。

今は誰も見当たらないが、いつもは人で溢れている場所で妹の頭を撫でるところのは少し恥ずかしい。

だがこれも兄としての勤めである。はにかみながら愛しの妹に手をのばした。

「よしよし、なでなで」

気持ちよさそうに皿を細めて撫でられるがまだ。

「満悦の美弥だったが、薄紅色だった顔が心なしか青く変わつていく。我が妹らしからぬ驚愕きよくがくの表情で怯えているようだつた。

「美弥？ どうした、大丈夫か！」

なすかな声を残して卒倒した美弥。その体をあわてて抱きかかえる。

「美弥、美弥！」

「元、兄さん……」

ふらついている腕を桜の方へ向けて、力なくうなだれてしまった。

俺はおしゃるおしゃる慎重に、美弥の指が示していた背後を振り向く。

長い銀髪を風になびかせていた少女がそこには居た。吹き抜け
る桜に舞つ銀の軌跡。

派手すぎない装飾を施した白衣と、胸元に見える朱い挂襟。かけえり同じ朱
色の足元まである緋袴。ひばかまそこからちりんと飛び出た白い足袋。たび

これは巫女服だな。

しかもただの巫女服じゃない。素人目から見てもコスプレや神社で
見るバイトの巫女さんの着ている物より、ずいぶんと高級品である
う。

だがせつかくの巫女服もあちこちすすけたり、ほつれてい。なに
よりこれを着ている銀髪少女は頭を抱えて丸くなりながら、小柄な
体をブルブルとさせている。

そんな仕草が、まるで雛鳥のように思えた。

なんかすくなく残念な感じだつた。

だがそんな姿がだんだんと愛らしく思えてくるから不思議だ。

いつしても埒が明かないので、思い切って話しかけてみる。

「あの……」

ぴくりと反応する少女。

片方の瞳だけを使い、おひかなびつくつ上田遣いに覗きこむ。

かわいい……。すっしゃりあげたくなる。

「萌えとは、保護欲と支配欲との葛藤からくるものである」と、聞いたことがある。今感じてこの感覚が、その萌えとこうやつなのだ。

そんな彼女と田が合ひてしまった。

「ヒツ」

短い悲鳴をあげて顔を伏せてしまつ。

そして、再びゆっくりと腕の隙間から顔を出す。

かわいい……。

不意に、彼女がこちらを見つめかえしてきた。

大きくて純真無垢な瞳。

「…………そ、そなたは、その……、東の者である」

搾り出すよつにして出された声。風にかき消されそうで聞きたるものやつじだ。だが澄んだ彼女の声はよく通るような気がする。

「俺の名前は東條信弥。」ひちは妹の美弥。君は?」

ゆつたりと立ち上がった小さな少女はととと近よつてくる。

腰まわりに抱きついて もとこ、しがみついて顔をぐりぐりと制
服につかめる。

「やつぱり東の者じやな。会いたかったぞ。よくぞ我を助けてくれ
たのじや」

震えていた割には、なかなか偉そつな言葉づかいである。両手で制
服を掴んでぐいぐいとやつてきて離そつとしない。

近くで見ると、やはり小さい子だ。ぼろぼろな簪かぶともよく見ると精巧
な造りで、わざわざ銀髪から薰かおる甘いお香が鼻をくすぐった。

揺わふられてこらへり、美弥が意識を取り戻した。

「……こ、兄さん私、宇宙を見たんです……。三次元宇宙を内包す
る四次元世界が干渉して生まれた時空の裏側を。私は確かに」

「もういいんだ美弥。世の中には忘れても許される事もあるさ。そ
れにこの物語はそういう方向性じやないんだ」

錯乱気味の妹を優しく諭す。

「よくよく解らな」ですけど……、兄さんが言つないそつなのかも
……」

よく出来た妹は物分りも大変よろしい。

そんな妹はおぼつかない足取りで立ち上がった。

まだ制服をぐいぐいとやつてる少女の田線にあわせて中腰になり、優しく語りかけた。

「こんにちは。私は東條美弥つていいます。よろしくおねがいします。あなたのお名前を教えていただけませんか」

「東の妹じやな、うむ。わらわは遙か昔この地を統べた魔王が一人、天白羽神玖珂院咲耶之姫じや。『咲耶』と呼んでよいぞ」

ピンポンパンポーン

（生徒の呼び出しをします。一年四組東條信弥。ならびに、一年二組東條美弥。至急職員室まで来るよう。くり返します。一年（

魔王（前書き）

真理子先生お手製のパンフですよ

魔王

遥か昔、人間と魔物は世界中で共存していました。

魔物とは、広くは大型の肉食獣から蛇や鳥まで多種多様な種族を含む、力を持つ者の象徴。

神、天使、悪魔、幻獣、妖精、ある地方ではドラゴン、ヴァンパイア、妖怪。

その中でも特に強い魔物達を人々は 魔王と呼んだ。

彼らは互いの領分を侵すことなく互いに助け合つよき隣人であった。しかし、人間にも魔物の中にも悪しき者が現れ小さな争いが絶えなくなつていきます。

ついに人間たちは魔物たちの討伐を決めました。

各地で力ある人間 勇者の指導の下、魔物を常世へと還します。

ただ、東の魔王だけは最後まで残り続けました。

この魔王はあまりの強大な力故に、常世へと還ることができなかつたのです。

時の勇者 東比之守あずまびのかみは魔王の心を封じこめ、常世じよへと還したのでした。

東武学園監修 やさしい魔王の歴史その一

受けとつたパンフレットを読み終える。

先ほど^{たみやまりこ}の放送で俺達をよびだしたのは、二学年副主任である 秦^は宮^{みや}真理子先生である。

どかりと座りこんでいる先生は、すらりと長い足を組みかえて面倒くさそうに言った。

「読み終えたかい。そういうわけでその子は魔王なんだ。よろしくしてやつてくれ」

「よろしくといわれても……。魔王が復活つて世界規模でなんとかやばい感じがしませんか?」

「その子はまあ大丈夫だろう……。それに弱い魔物 君たちが思^{はんせ}うところの悪魔とか妖怪とかは現世に結構いるんだよ。一般にはあまり知られてないかもしれないがね」

秦宮先生が天のなんとか 咲耶と名乗つた少女に視線を移す。

彼女は俺の後に隠れてしまつて離れようとしている。

確かにこんな子が魔王といわれても説得力が無い。

「魔王クラスの魔物だつてちょくちょく現世に来てるよ。今は西の魔王の稻荷神^{いなりのかみ}が遊びに来てるんじゃないかな」

西の魔王の名前を聞いたとたん背中に隠れている魔王がふるえあが
る。

「昔は共存していたんだから、早々めったなことは起こりないよ」

とつあえず、世界が滅亡するとかはないらしい。たぶん。

「神様でも魔王とよばれる理由はなんとなく理解できました。でも勇者ってなんか変な感じがするんですけど」

「魔物や魔王、勇者ってのは世界中にいるんだ。グローバル化の波に乗つて国際規格を決めてから日本語訳にすると勇者だつたんだ。あきらめろ」

「はあ……」

「それで、ここからが本題なのだが……」

ダルそうにしていた顔を少しだけ真面目にして、話を続ける。

「彼女はちょっとばかし特殊でね。魔王なのに幼く感じるのは封印のせいだろう。それをあんたが解いちやつたんだろうね」

「でも俺、封印なんて言われても……。何がなんだかさっぱりです」

「それは、そこの大白羽神様に聞いてみるのがいいんじゃないのかな」

俺のまわりをうろちよろしてゐる咲耶を捕まえて聞いてみた。

「わらわの封じた呪術を解くには二つの要素が必要じゃった。一つは東の血族である」と。一つは慈愛の心。一つは相手を思いやるものと、頭をなでるときの靈じや。わらわが現世うつしよに再び参るときには、『味方になつてくれる者が必要居るよ』と、東がはからつてくれたのじゃ」

あの時、慈愛の心で「大丈夫?」と声をかけて、美弥の頭をなでた気がする……。

「 素敵なお話ですね」

今まで話の流れを見守つていた美弥が言つた。

「……なるほどね。」この東武学園は天白羽神様を見守るためにできたものなんだよ。私はそのための現管理人みたいなもん。当時としては追い出す形になつてしまつたが……」

秦宮先生は複雑そうな顔をして、咲耶をじっと見つめていた。

「それにしても、天白羽神様はけつこう上位で取り扱い注意な魔王様なんだけど、どうしてこんなに内気な魔王様なのかしら?」

秦宮先生が咲耶を見る。

同じ疑問を持つた俺は、彼女に聞いてみた。

「常世じょうぜいでみんなわらわに意地悪するのじゃ。いやだつて言つてゐるのに離してくれないし。おまけにあちこちあわつてくるし。むりや

り」飯たべさせられたり。なにかにつけてわらわをいじくりたおすのじや。もういやなのじや……。わ、わらわにも人権といつものがあるのだ。それに

「

「あつひこぬつちこ、だんだんと田に涙を浮かべていぐ。

これだけ聞くと、なんとなく卑猥に聞こえてしまつた。

魔王は腕をぶんぶん振りまわして必死に訴えてくる。

かわいがる気持ちも判らなくもないが……。

思いのたけをぶつけ終えた咲耶。

すくすくと胸中に隠れてしまつ。

そして秦富先生は彼女の話をまとめた。

「どひやうの魔王様は、いじめられてこんな性格になつてしまつたらしこ」

「…………」「…………」「…………」「…………」「…………」

場の空気が凍りついていた。

あ～～、言つてしまつた……。

俺と美弥が気づいても言わなかつた一言を、本人に向かつてド直球で言つてしまつた。

しつとした顔でいる秦富先生。

咲耶も俺の制服の袖をつかんで動かない。

この沈黙を破ったのは以外にも咲耶だった。

「……せいふく。せ、世界征服じゃ。あやつらを見返すには……、この地をわらわのものにするしかないのだ！ 信弥もわらわの右腕となり存分にその腕振るつとよからう。期待してあるぞ。な？ よいじやろ？」

取り扱い注意の魔王に世界征服を宣言をせてしまつた。

さりと、それを俺に手伝えと言つては。 と、いうか、お願ひされている。

でもこの子が俺の背中に隠れていひは、世界は平和なままだろう。

魔王の宣言を完全にスルーの秦富先生は、ハツと思ひだしたよつて言つた。

「東條、一番大事なことを言ひ忘れてたよ。咲耶様は今日からあなた達の家で暮らすことになるから。ついでに明日から信弥君と同じクラスで授業を受けてもらうことになると思う」

「は？」

「東武学園は天白羽神様をお世話するためにあるんだよ。彼女も信
弥君に懐いているみたいだし、現世に慣れてもうには丁度いいじ
やないか。……なんだい。親御さんから魔王について、本当に何も
聞かされて無いみたいだね」

新たなる旅立ち（前書き）

「いいですか咲耶さん。もう桜の木の前でやつたよついに、^{げんせ}宇宙の法則を捻じ曲げてはいけませんよ」「ええ~~~~~」「ええ~~~~~じゃありません。それに咲耶さんは女の子なんですから、はしたないことをしてると、兄さんに嫌われてしましますよ」「う~ん、……わかった」「はい。咲耶さんはいい子です」

新たなる旅立ち

俺と美弥は魔王を家に連れて帰つた。

帰り道、二人は女同士の秘密の話をしていたらしい。

話の内容を美弥に聞くと、顔を赤らめて「兄さんは不潔です」「なんて言われた。

咲耶に聞いても口止めされていたらしく、話してくれない。

なんだか仲間はずれな気分だ。

帰ると、親父がすでに家にいた。

話があると言われて、リビングの四人がけテーブルに並んで座る。

美弥が麦茶をだしてくれた。

咲耶は冷たい飲み物に目を輝かせていた。

「天白羽神玖珂院咲耶之姫様ですね。お初にお目にかかります」

「つむ、くるしゅうない。信弥のお父君であるな。我のことば、『咲耶』と呼ぶがよいぞ」

仰々しく挨拶をすませる一人。

「おじ親父、こんな時間に家について仕事はいいのかよ

「うん、仕事は辞めてきた」

「はあ？」

「親父もついに不況の波に呑まれたか……。

「まあ聞きなさい。私もお前のお爺さんから、勇者だの魔物だのとは聞いていた。だが私はそんなものとは縁もゆかりもない世界で、世間の荒波にもまれながら社畜として一生懸命に働いてきた……」

しみじみと語られてしまった。

「だが今日、魔物を管理する団体から『咲耶様のお世話をする代わりに』と、多額のお金を貰つてな」

「いくつもりつたんだよ」

「ヤニヤと汚い笑みを浮かべた親父は、もつたいぶつて言った。

「ん～、信弥にはお金の話はまだ早いかな～？ あえて言うなら、贅沢しても遊んで暮らせるくらいだ。そういうわけで、私と母さんは世界一周の旅に出かけてくる」

「はあ？」

「この人数だとこの家も手狭に感じてしまうだろ？ それならいつそのこと、母さんの夢だった世界一周旅行にでも行こうかなって。ほら、今つて円高だし」

なんとこいことだ……。

俺が咲耶と出合つて半田も経つてないのに。

その行動力を他の所で生かせねば、もつと出世できたひつ。

「毎週ポストカードを送るから、そんなに寂しがるなよ」

「いや、そういう事じゃなくて……」

「戸締りと火の元の確認はしつかりするよつ。美弥、信弥と咲耶様のこと……、よろしく頼んだよ」

すがるよつな目で親父は言つた。

「はい、お父さん。気をつけて行つてきてください」

「じゃー」と、一言残して親父は旅立つてしまつた。

よく出来た妹は何事にも動じない。

俺は呆然とその背中を見送るしかなかつた。

状況を飲み込めていない咲耶。

麦茶の氷を口に入れて目をギューッと閉じ、身を縮こまらせながら冷たさに耐えていた。

常世《ヒル》（龍書き）

現世^{うつしよ}にオチル。

現世^{げんせ}に生きる。

「兄さん。まずは咲耶さんの部屋を決めなくてはいけません。隣の和室を使いたいと思うのですが」

「わいわは信弥と一緒に暮らすのもよござ」

「やうじいわけにはこきません。兄さんは和室の方付けをお願いします。私は夕食の用意がありますので」

流行っているらしい『ゆるキャラ』の大きなワッペンを付けたエプロンを装着して、いそいそと台所へと向かう。

炊事・洗濯・掃除と、家事も万能の妹の意見はこの家では絶対なのである。

「よし咲耶、美弥様からの勅命だ。和室を平定しにいくぞー。」「おー！」

左足にへばりついてる魔王を引きずつて、普段使われていない和室にやつてきた。

扉を開けると、い草の落ち着いた青い匂いが広がる。

すりガラスを障子に似せた窓が一つ。

畳ばかりの部屋で、日当たりは悪くない。

床の間にはなんだかよくわからない水墨画らしき掛け軸が飾つてある。

特に汚れているわけではないし、部屋として使う分には十分だろつ。

だがダンボールに詰められた荷物が、五重・六重の塔を建立していった。

「じゃーまずは、」この塔の解体作業からだな

ガムテープで封がされてない物だけ中身を確認して、目録を箱に書いていく。

昔懐かしいアルバムなんかもでてきた。
これを開いてしまうと晩飯が遅くなつてしまつ氣がする。
俺はそつと箱の奥へと戻した。

昔の教科書や小さくなつた古着はこの際に捨ててしまおう。
美弥の服は咲耶が着られるかもしないので除外する。

そんな感じで、黙々と楼閣を崩していく。

咲耶は不思議な物がたくさん出てくる箱に興味深々だつた。

最初こそあれやこれやと騒いでいた咲耶だったが、単純作業に飽きて来たらしい。

手を動かす俺のまわりでバタバタやりはじめた。

拳句の果てには背中に飛び乗つて来たりとやりたい放題だ。

だが肩口から顔をだす彼女の長い銀色の髪が頬や首筋を撫でていく感触はちょっと気持ちよかつたりする。

「し～ん～やあ～～う～～」

だらしない語尾をかわいくのばして、畳の上をうねうねと転がつて
いる。

ズゴッ！

痛そうな音が響く。

「 ッー！」

「く」の字になつて後頭部を押さえながらバネみたいに伸び縮みして
いた。

「咲耶、大丈夫かい？」

しづらりくもんぢづりしていた彼女は、目に涙を溜めて擦り寄つてく
る。

「しんやあ～痛かったのだあ～。撫でてほしごぞお～」

言ひ終わるのが先か、勢いよく飛びついてきた。

受け止めると予想外の衝撃と一緒に倒れこんでしまう。

放り出されなによつてつかりと抱きとめて、空いてくる手で頭を
ぐる。

体を預けてきた咲耶は、過去を懐かしむよつて語つた。

「……暖かい。東にはよく「うして頭を撫でられたものじゃ。あやつはすぐわらわを子供のように扱いたがる。わらわはそんなことで喜ぶような童では無いと言つたのに。じやが常世へと還れたのは、あやつのおかげじゃ。感謝してもし足りぬ。あのあと、東はどのような生涯を送つたのじゃらうか。それだけが、唯一の心残りじゃつた。じやが、もはや過ぎ去りし事。信弥とこつして逢えた事が、あやつが生きた証である」

咲耶の過去を少しだけ垣間見た気がした。

少し悲しそうにしている姿は儂げで、物思いに耽るよつとして彼女は胸の中で動かなくなってしまった。

朱と白の巫女装束に彩られた輝く銀の髪と整つた顔立は、どこか神秘的な感じをえする。

そんな咲耶の頭を撫でてあやしながら、しづらへ抱いていた……。

それにしても、咲耶はずいぶんと東さんがお気に入りのようだ。目の前にいる俺のことも見てほし……。

そこで気づいてしまつた。

俺は自分の「先祖様にちょっとばかり嫉妬しているのかも」と。たつぱりと撫でても、うえた咲耶は満足したのか、よじよじと立ちあがる。

そして、そもそもの頭をぶつける原因となつた退屈について不満を洩らす。

「信弥、いつまで箱を開けて閉めてをくり返せばよこのじや。わらわはもううどぞりなのじや。もつとほかにやることはないのか?」

「ダンボールは仕分け終わつたから、必要な無いやつは物置へ運ぼう。咲耶も手伝ってくれるかな?」

「うむ。大船に乗つたつもりで我にまかせるがよいで

「「」うち側にあるやつを「」階の奥の部屋に持つていへから、「」の小さい方を持つてもらえるかな」

衣類が入つた軽いダンボールを選んだつもりだつたが、彼女はふりふりと怒つてゐるようだ。

「わらわ自らが肉体労働に精を出さうといふからに、「」んなちんまつとした物など運べるか。そちらの、どうじつとして重そうなのをわらわが引き受けようがわないか」

張り切る気持ちも判らなくもないが、その中には親父が使つていたであろう分厚い本が隙間なく詰められている。

小柄な彼女では持ち上げることすらできないだらう。

「ふんつ、んぬ~。 つはあ! はあは……」

「それは咲耶には難しいよ。ほら、びくともしないじゃないか」

案の定ピクリとも動かない。

だが彼女は上下に動かせないと見るや、あわてとか今度は横からダンボールを押しはじめた。

「 つぬう～～～～

それでも頑なに動こいとしないダンボール。

履いている足袋が畠の田に沿つてつるつると滑つていてんだ。

我が家^はの魔王はずいぶんと華奢な足腰^{かわらじや}であった。

びつやつとも文字通り動かせないと語った咲耶。

その様子を一^一ヤ一^一ヤ見ていた俺に対して視線を合わせよしとせざ、ばつの悪やうに言った。

「久方^{ふつ}の現世^{ゆえに}、このよつなことも稀に起じつえるやもしれんな……。だ、だが！ わらわも一度言つたからにはこの務め、見事果たしてみせようぞ」

言い訳がましくの給^{のたま}つ。

今度はその場に立たなくなる。

純粹な瞳が、田の前の虚空を映す。 じょつてをゆつくりと、むねのまえで、ひろげて。 いわおいを、ツケテ。 テヲ、ウチナラス。

パンツ！

その刹那、咲耶とそのまわりの空気が冷たく停まったような気がした。

その気配は存在を濃くして俺に迫る。

残酷な世界が俺に纏^{まと}わり憑いて離れない。

天地の感覚が無くなる。

落ちていく。墜ちていく。

だが上も下もない所に墜ちることはできない。

ここに居る自分の存在がどこか別の場所にオチテいくのがわかる。

オレではない、口口ではない、^は常世^{なよ}に。

咲耶の柏手^{かじわで}が終わった。

俺はおちていた。いや、もしかしたら昇っていたのかもしれない。

咲耶の拍手が響いている間。その数瞬。咲耶の音に連れ去られてしまった。

急にあたりが明るくなつた気がした。帰ってきたのだ。^う現世^{じよ}に。

だが、俺は気づいてしまつ……。

魔王がこちらを覗覧していた。

微妙に歪められた口もとが艶然とした笑みを浮かべ、妖艶で魅惑的なその顔はなによりも美しい。

吸い込まれそうになる。

その顔に。

なにもかもを認め、 許し、 徒い、 受け入れ、 差し出し、 。

「 東の者よ、 」この程度で侵食まれるではないぞ」

魔王から聞こえたような気がしたその声は、 俺の頭の中を廻り廻つて、 やつぱり咲耶から聞こえた気がした。

いつの間にか、 彼女の顔からは挑発的な微笑は跡形も無くなつていた。

そのかわりに向日葵のよつな満点の笑顔を咲かせていた。

今のは、 何だつたのだろう……。

そんな疑問をよそに、 咲耶は得意げにダンボールを掴んだ。

「よいか、よーーー、見ておるのじゃ、ヤ」

そう言つて、やつを今まで一ひとつも動かせなかつたダンボールを片手で摘むように持ち上げたのである！

「ほれ、どうじゅー。それ、それ！」

まるで綿でできたクッショーンを弄んでいるかのように投げたり、突いたり、回したり。

先ほどの臨死体験など頭の隅に吹き飛んでしまつほどに驚愕した。

この時の俺は口をあんぐりと開けて、たゞ滑稽に見えていただらう。

してやつたり顔の彼女。

にんまりとした顔でこちらを見ると、あんづいとかそのダンボールを投げてきた！

「わあああー！」

慌てて飛びのく。

重いはずのダンボールはふわっと木の葉のように舞い、壁にぶつかるとそのまま床に落ちていった。

腹を抱えて笑つて居る咲耶を無視して、そのダンボールにふれてみた。

「やめやめやめやめ！」

めちやめちや軽かった。

たしかに分厚い本が何冊も入ったままの、先ほど彼女がまったく動かせなかつたダンボールである。

どうこう事かと思案していると、ひとしきり笑つた咲耶が種明かしをしてくれた。

「わらわのよつな者にとって物の重さなど些細なこと。わらわの意志ひとつで、羽のよつとも岩のよつともなるのじや。」この部屋にある箱はすべて軽くしておいたぞ。わあこれを持つていぐのじや

俺と咲耶は中身のつまつたダンボールを高く積み重ねる。そのまま無造作に持ちあげ悠々と運んでいった。

その様子を叩撃した美弥。最初こそ驚いた表情でこちらを見ていたが、一往復田には「咲耶さんはお手伝いして偉いです」などと褒めほめる始末。

その言葉に咲耶は、てれ笑いで答えていた。

戦慄の、あ～～ん（前書き）

もぐもぐ……、もぐもぐ……。

戦慄の、あ～～ん

テーブルに座つた咲耶は、今か今かとそわそわしていた。

台所から次から次へと運ばれてくる我が妹お手製の色鮮やかな料理たち。

ご飯にお味噌汁から始まり、おひたし、厚焼き玉子、お刺身、天ぷら、鳥のから揚げ、ハンバーグにポテトサラダ。

香ばしくも甘い匂いが食欲をかきたてる。

美弥が配膳している間は手持ち無沙汰だったので、三人分の飲み物をついでまわる。

「ずいぶんと豪華な夕食だな」

「今日は家族が増えた記念すべき日ですから、奮発してしまいました。咲耶さんのお口にあつと嬉しいのですけど」

当の本人は、眼前の料理をギラギラとした目つきで食い入るよつこ見ていく。

何事かを尋ねられたことに気付いた咲耶は、白く長い袖で口元をじごじごと拭つて答えた。

「つむ、くるしゅうない。して美弥よ、これは全部食べてもよいのか……？」

「もちろんですよ。待ちきれないみたいですので、いただきましょうか。咲耶さん、お腹いっぱい食べてくださいね」

「いただきます」と皿で手を合わせた。

いつも通り妹の手料理ほどのものはない。

甘くて絶妙な塩加減のふわふわな玉子に、甘辛く揚がったジユーシーから揚げ。やわらかくて中までしっかりと火の通ったハンバーグは箸を入れると肉汁があふれ出てきた。

力チャ力チャと食器がぶつかる音がするので何事かと見やると、咲耶が小さな手で箸を使って食べ物をかきこんでいる。

こぼれて散らかり、世辞にもお上品とはいえない。

その様子を見かねた美弥は食器棚からあるものを持ってきた。

「咲耶さん、これを使って食べてみてはどうでしょうか

いわゆる先割れスプーンというやつを勧める。取っ手がプラスチック製で扱いやすそうだ。

「それはなんじゃ、皿ののか？」

「これはお箸の代わりに使います。食べやすいと思いますから使ってみてください」

素直に受け取る咲耶。

訝しげにスプーンを見たあと、おもむろにその鉄の塊にかぶりついた。

ガリツ。

かぶりついたままの格好で動かなくなってしまった。

その一部始終を田撃してしまい、思わず口の中のものを噴き出しあうになる。

「「ゴハツ、「ゴハツ。 な、なにやつてるんだよ咲耶。くつくつ、はははははつ」

耳まで真っ赤にしながら下を向いて必死に何かを耐えている。

さすがの美弥もこれには口元を隠していくすくすと笑っている。

遠慮なく笑っていたら咲耶は睨みつけられた。その後、何事もなかつたかのようにスプーンを齧づかみハンバーグを乱暴にぶつ切りにして、ご飯といっしょに口に運んだ。

「咲耶さん私が食べわせてあげましょつか。はい、あ～～んしてください」

「よい、食事くらい一人でできるのだ。おい。こら、よきぬか

「私のお料理は、お口には合わなかつたでしょ……」

箸に玉子を挿みながら、ずいぶんとわざとらしく残念そうに振舞う。

「べ、別に不味いなどとは言つておらぬではないか。むむっ、しうがないの。い、一回だけじゃからな」

咲耶はまるで親鳥に餌をねだる雛鳥のよつと首のばしり紐をついてばむ。

「あ～～むっ」

もぐもぐ……、もぐもぐ……。

「 ッ！」

玉子を与えた美弥に衝撃が走った！

「あ～～ん」する咲耶が狂おしい程にめんこいのだ。かくいう俺もその庇護欲あふれる光景にただ心を奪われていた……。

あまりのかわいさに放心していた美弥は意識を取り戻すと、今度は贅沢にもエビフライを雛鳥に向かつて差し出した。

「はい咲耶さん。今度はエビフライです。あ～～ん、してください。あ～～ん」

「い、一回だけと、言つたではないか……。これで最後じゃからな」

「あ～～んう。あむっ、あむっ」「

もぐもぐ……、もぐもぐ……、もぐもぐ……。

まんざらでもない様子の咲耶は差し出されたエビフライを小さなお口でぱくつく。長細いエビフライは彼女がついばむ姿を長く見させてくれた。

美弥は頬に手を当ててうつとりとその様子を見蕩みどれている。すでに彼女の箸には次の料理がスタンバイしていた。

「あ～～むん」

「…………、 もぐもぐ…………、 ポックン。」

「 も、もういれで、もうもう…… や、やこ、じやから

「あ～～む」

。 べくもべくも

なんだかんだ言いつつも律儀に美弥の「あ～ん」に答える。

「あ～ん」

「せこどり。あ～～ん、してください」

差し出されたから揚げを頬張つてから、たまらず席を立つ。こちらに走り寄ってきて美弥から隠れるようにしてすがつてきた。

「もぐもぐ……、もぐ、もぐもぐ……、ゴックン。よ、よさぬか。もぐもぐ……。なあ信弥、そなたからも、もぐもぐ……なにか、言うてやるのじや。もぐもぐ……」

もぐもぐと雛鳥が親鳥に向かつて威嚇する。

助けを求められたが、俺はこの誘惑には勝てなかつた。

「咲耶……。はい、あ～～ん」

「 ッ！」

呆然と立ち尽くしている咲耶……。

信じていた信弥に裏切られて絶望の底に落ちている。

この場に彼女の味方はいなかつたのだ。

しばらく動けなかつた咲耶。我に返ると、再度お口をもぐもぐします。

ゴックン。

そして、観念したかのように差し出されたハンバーグにかぶりついた。

「もぐもぐ……、もぐもぐ……。ゴックン。い、これでよいの

じゅる……」

涙目になりながらもぐもぐする咲耶は、とても可愛かった。

征服のススメ（前書き）

魔王より美弥さんの方が怖いです。

征服のススメ

思つ存分「あ～ん」させてもらつた。

あれだけあつた料理も三人のお腹の中に消えてしまい、わずかに残つた分をちびちびとやつていた。

お腹をぱんぱんに膨らませた我が家の魔王は椅子にだらしなく座つて、満足げな表情を浮かべながらぐつたりとしていた。

あの後さすがにやりすぎたと反省した。

平謝りしてると根負けした咲耶が『無理に食べさせない』とこいつ条件つきで、また「あ～ん」をしてもよいと言つてくれた。

なんだかんだで彼女も「あ～ん」が好きなのではないだろうか。

その証拠に残つたから揚げを皿の前にもつていいくと、咲耶は嬉々とした表情で飛びついてきた。

ここにこじした顔をしながらもぐもぐしてからゴックンと飲みこむ。

その後彼女は「うう～～」としんじん呻き声をあげてから、お腹をかかえて先ほどよりますます青い顔をしてよけいにじべつたりとした。

美弥はそんな彼女を嬉しそうに眺めている。

「お～～しんやあ～～

「どうした？ まだなにか食べたいものがあるのか？」

「たしかに美弥の料理はうまいが、今はもうよい。それよりも透明で冷たい飴の入った飲みものと、世界が欲しいかのお～～」

学園で言つていたアレか……。だが一口に世界征服といつても、お菓子を買つたついでに付いてくる食玩を手にいれるようなノリで世界は手にはいらないと思うぞ。

「『見返す』とか言ってたけど……、具体的に何をどうしたいんだ」

「うむ、よくぞ聞いてくれた」

待つてましたと言わんばかりの勢いで話を続けた。

「まだ魔王達が現世を統べていた頃の話じや。わらわは四つの島からなるこの大和の半分を統べる魔王じやつた……」

「元」

思わず疑問の声が口をついて出た。

「う、うるしゃい！」
コホン。ともかくあの頃は他の魔王もわらわの強大な力に恐れをなして、手を出すどころかわらわに足を向けて寝ることもできなかつたのじや。じやから奴らを見返し、力を誇示するためにてつとりばやく世界征服するのだ！」

言い張る彼女だったが、半分とか足を向けての部分はかなり怪しい

といひである。

「はい咲耶さん。氷の入った飲み物のです」

先ほどの要求の片方をこれで満たしことなる。

魔王様に捧げられた飲み物からは、じゅわじゅわと泡が吹きだしていった。あれは冷蔵庫に入っていた イダーだと思う。

熱くもないのに泡が出ている不思議な水に、咲耶は身を乗りだしてひどく興奮している。

美弥はこのあと起つてあわてて出来事に息を荒くして、期待の眼差しを向けている。

「うへん……。

「わやああああああ！」

そんな咲耶を尻目に、俺は和室での一件を思いだしていた。

咲耶の不思議な拍手とそれによつて起つた魔王の御業。

口からサ ダーを吐きだし、悲鳴をあげて部屋の中を走りまわつてる彼女がその気になれば、俺の知つてゐる人間の世界を征服するといつ漠然とした内容の夢物語が現実のものとなつてしまふかもしない。

もしかしたら俺が咲耶に冗談のよつて言つた一言で、世界が滅ぶ。

自覚してしまつとけよつとだけ怖くなつてしまつ。

だがひいひい言いながら戻つてきた彼女を見てしまつと、そんな考えは杞憂だったかもしない。そう思える。

しかしながら、一連の騒動を悦とした表情で見てくる美弥だけは怒らせぢやいけないと確信した。

「ねわんじやこれは！ 口が焼けてしまつたかと思つたぞ…」

「サイーってのはそういう飲み物なんだよ。慣れるとそれが癖になつたりするんだ」

「もう大袈裟よ咲耶さん。そうだ、今度はこれを使ってみたりどうでしょ」

そつ言つて取り出したるはストロー。サイダのコップに入れると氷が心地いい音を響かせた。

「なんじやこれは？」

「これを吸つとですね、なんとその下の飲み物を飲むことができるんです」

咲耶は先ほどの失態を払拭するかのように、無駄に尊大な態度で言ひ。

「ふふふ……、美弥よ。いくらわらわが現世うつしよに疎いからといつても

そのよつな世迷言を信じるわけがなかろつ。……よろしこ。そのよ
うな絵空事など無いことを、我が身をもつて証明してやうひではな
いか」

自ら断頭台に立つた彼女は、神妙な面持ちでストローに口をつけ、
思いきり吸つた。

「うあああああああ！」

一切の遠慮なしに吸いあげられた冷酷な炭酸は口内の奥深くまで侵
食し、その幼い柔肉に執拗なまでに鋭い刺激をあたえる。

「ああああああ！」

いたいけな子羊は痛みの矛先をもとめ無自覚に彷徨いだす。

「おおおおおおおつ ッ！」

逃避行を続ける爪先が立ち塞がる壁に激突する。

「ふんぎゅあ、へぶあつ」

這い上がつてくる雷の如き衝撃に、制御を失つた幼体は無様に地を
這つた。

「うあああ、ひあああ、ひあああ、」

もはや絶え間なく押し寄せる鈍痛を耐え忍ぶしかない。

つまりストローで思いきり吸つた炭酸に驚いて暴れまわり、足の小指をぶつけた拍子に転んだわけだ。さすがにこれは同情せざるをえない

そんな原因を作った張本人である俺の妹は、聖母のような慈愛でもつて悲劇の魔王に手を差し伸べた。

「　咲耶さん、痛かつたですよね、苦しかつたですよね。でももう大丈夫です。」

「みやあ、うわわわわわああん」

ぴつたり抱き合つて^{いた}労わり合つて一人。

悲しんでるいる咲耶に、嬉しそうな美弥。これじゃどちらが魔王だか判らなくなつてきそつだ。

ぐずぐず泣いている子羊に、聖母美弥が頭を撫でながら優しく仄めかす。

「痛いのは治りましたか？」

「うん。ありがとうみやあ。おぬしのおかげなのじや」

いや、そもそも事の発端は……。

「咲耶さんも人にいっぱい感謝されるような、立派な魔王様になりましようね」

「そ、そしたら、わらわはこんな辛い目にあわずすむのじやろ

「うか……？」

「もちろんです。そなつたらみなさん咲耶さんの」とを可愛がつて、世界征服だつて出来てしまつかもしれませんよ

「……わかったのじゃ……。わらわの進むべき道が、見えた『氣がするのじゃ……』

どんな道なんだよ……。果てしなく険しそうだな。

「じつやつたら立派な魔王になれるんだ?」

ため息混じりに聞いてみる。

「兄さん、ボランティア部なんてじつしちゃう?」

「なんなのじゃ? それは

「世の為、人の為になる事をする所ですよ」

いつつて、ボランティアで世界征服への幕が切つて落とされたのである。

お風呂　caution（前書き）

この部は、このまで読んで戴いた方のお礼の意味を込めまして、完全なサービス回となつております。内容としてはお風呂には入っただけです。どの部も伏線や後々に繋がる様な内容であるのに対しても、この部を読み飛ばしても全く一切影響が無い内容にしたつもりです。さらに付け加えると、この作品はR-15指定でも無い為にそれっぽい描写もありません。が、しかし！内角、ギリギリいっぱいを攻めて行くつもりです。ご理解のほどをよろしくお願いします。

咲耶と一緒にお風呂に行ってくれるぜ

「咲耶さん、そろそろお風呂に入りませんか？」

美弥が唐突に言い出した。 (88-1)

「な、なんじや美弥よ。 藪から棒^{やぶ}に」

「だつて咲耶さんあひきいち汚れてしまつています。 そんなことでは立派な魔王になることなんて出来ませんよ」

「わ、わらわのよつなやん」となき身分の者に、そ、そ、そのよつなことは、か、関係ないのじやー。」

おかしい……。

今日一日中落ちつきのない咲耶だが、輪をかけて浮き足立つている。

これはナニがあるな。

「そんなことを言つてると、兄さん嫌われてしまこますよ」

「 ひー。」

その一言に肩を震わせて反応した彼女は泣き声つな田で「ひりを向う。

「の、のお信弥よ……。そ、そ、そなたは、風呂に入らぬわらわは……、嫌いになると申すか?」

俺は瞬時に思考を張り巡らせた!

(飛ばしてもいいです)

(この様子から察するに咲耶はずばり風呂が嫌いなのだろう。魔物咲耶は魔王だが、に風呂に入る習慣どころか獣のようなものと連想する魔物という言葉の響きから身嗜みなどという概念があるかさえ微妙だ。桜の前であつたときもお世辞には綺麗とはいえないがつたし。考えてみれば大昔には風呂に毎日入るなんて習慣はなかつたはずだ。さすがの魔王だけあつてそれなりには小奇麗にしてたみたいだが。それを踏まえて、もしここで「そんな事は無い」と言つた場合はどうだろう。直前の会話から鑑みるに咲耶は俺の意見を重視するだろう。風呂が嫌いである彼女のことだから俺が入らなくても気にしないと言えば恐らくは入らないだろう。しかしそのような事態になつては前書きで読者様に宣言したことが果たせなくなつてしまつではないか! もはやこの答えはあえないな、論外だ。

俺的にも一日中騒いで埃まみれの巫女服でべたべたされるのはちよつと遠慮したい。まあこんなことは解り切つていた事だらうしアレだけ前置きしておいたにも関わらず今現在この箇条書きを目で追つてる読者様にもそのような事を期待される方は誰一人として居ないであらう、と俺は確信している。では「気にする」といた場合だ。というか「気にする」と言います。そうでなくては始まりません。ではなにが問題かというと俺が男で咲耶は女? である事だ。? なんて付けてはいるが別に咲耶が女であることを疑つてはいる訳ではない。ただ俺は咲耶は人間ではなく魔王様であると言つことを表現したくて? を付けたのだ。敬虔である大変ありがたい読者様にはなにを今

更と言われるかも知れないが咲耶は美少女である。私の拙い表現力で出来るだけ精一杯に描写していたつもりである。何度も可愛い可愛いつて言つてきた。しかも口リツ子なのである。しつかり口リツ子なのである。大事なことなので一回言つた。むらに巫女装束でリアルではありえない銀髪ロングで一次元だからこそ許されるドジつ子と魔王というテンプレ的属性を持つスーパー・ヒロインなのである。ここまで書いて作中での咲耶に対する好き好きオーラがちょっと足りない気がしてきたので次からは気をつけようと思う。なにが言いたかつたかというと、咲耶とお風呂に入りたい。……ちょっとと興奮してしまつたが話を元に戻そう。つまりだ、俺と咲耶は性別が違うワケ。それがなに? って思われるかも知れないがとても致命的である。なんといっても我が家には良く出来た万能妹が居る。そんな彼女が口リツ子とお風呂なんて許してくれると思うか? いいや、おれは思わないね。だから素直に「気にする」と言つてはダメなんだ。解つてくれたかな? さて、そこでどうのようにしたら美弥を納得させて口リツ子と一緒にお風呂に入れるかという話に戻そう。ここで注目すべきは咲耶は俺のことをすぐ意識してるのである。これを上手に料理して美弥を納得させた上で悠々自適に口リツ子とのお風呂を楽しむというのをベストな結果として考えていいみたい。なんなら美弥と一緒に3Pでも俺はかまいませんよ? まったくの箇条書きなので話が飛んで申し訳ないがどうしたら咲耶と、って事だつたな。俺も今から考えるぞ。

「ううのはどうだらう。咲耶から俺と入りたいと言わせるのは。これなら俺がしょーがないなーって言いながらキヤツキヤうふふできると思わないか? 俺から言い出せない以上そうするしかあるまい。じゃ具体的になんと言おうか。ここで咲耶の気持ちになつて考えてみようじやないか。咲耶は俺と一緒に入りたいはずだ。まちがいない。じゃ俺もそれを匂わせるような発言をしたら咲耶の方から誘つてくれるのではないか? 完璧じやなイカ? よしこれでいい? では具体的にこういうのはどうだらう。『やつぱり気にしちゃうかな……。咲耶の長くて

綺麗な髪がもつたいたいないよ。俺がお手入れしてあげたいくらいだ」「ぶつけ本番で考えた割にはけつこういい線をいつてないか？」直接言つ訳ではなく、それでいて咲耶と一緒に居たい。面倒を見させて欲しい。髪を洗いたい。お？　お？　じゃーこれで逝きます。）

（お疲れ様でした）

「かっこいいほどの脈動を見せた俺のシナップスが時空を超えて、俺は一つの未来を導き出した。」

それを俺は提示しよう。

「やつぱつ気にしちゃうかな……。咲耶の長くて綺麗な髪がもつたいないよ。俺がお手入れしてあげたいくらいだ」

よし、言つてやつた！　完璧。後は一人がどう出るか……。

「ひ、うむ。わらわもこの長い髪は自慢のじや。し、信弥がそのみて艶のある綺麗な銀髪は女性の私から見ても憧れてしまつます」

美弥は咲耶の長い髪を手櫛で整える。咲耶は上機嫌だ。

「な、なあ信弥よ。そんなにわらわの髪を気にいったのなら……。い、いっしょに」

キタ （。 。 ） ——！

「これで勝つる！
が、しかし。

「ダメですよ咲耶さん」

「ツ！」「ツ！」

俺は青い顔をして、咲耶は赤い顔をして。

この家の裁定者であり、執行者であり、断罪者である美弥の、次の御告げを待つた。

「兄さんもです。一人でお風呂なんて言語道断です。見過い」す訳にはこきません」

なんといつことだ……。

でも薄々こいつなるんだらうなとも思つてた。

桃源郷には誰もたぢりつけないのである。

「しかしですね、咲耶さんが一人でお風呂とこいつのは色々と心配で
はあります」

え？

絶望の暗闇の中から、一筋の光が差し込むかのようだ。

「 ですでので私が咲耶さんと入ります。さあ一緒にお風呂に行きましょう」

終わった。

まさにオワッタ。

俺の聖戦ジハドは終わりを告げたのだ。

無駄にキーボードを叩いただけだったのだ。たたいただけだったのだ。た、が多い。

おれはいつして戦いに敗れ去った。

視界が暗転する。

そり、俺の役目は終わったのだ。

みんなを理想郷アルカディアに導くことが出来なかつたふがいない俺を許してくれ。

後は……。

「咲耶さんの巫女服は、なんというかす”いですね」

美弥は咲耶の着ている巫女装束をあらかた脱がしきつた。

「これは手洗いしないといけませんね。生地の量も多いですし……。乾かしている間は申し訳ありませんが咲耶さんには私が昔着ていた服があつたと思うので、そちらを着ていただく」となるかと思いま

脱がしている最中の咲耶はまるで借りてきた猫のように大人しくしていった。

これから起じるであろう苦行を想像しただけで身の毛がよだつ思いだった。

実際彼女の柔らかくきめ細かい肌に似つかわしくない鳥肌がぽつぽつと出来ている。

「もう咲耶さんそんなに緊張しないで下さい。今まで緊張して来て
しまいます」

「ふ、ふ、ふ、つかじじゃな。わらわとこべぢか、い、い、い、いのよひな」とせ、なれどおらぬみえに

「私が一緒ですので大丈夫です」

「だが、とは言わないが色々と貧相な魔王の生まれたままの姿を露あらわにさせた美弥は、今度は自分の番とばかりに上着に手を掛け一息に脱いだ。

どこが、とは言わぬが脱ぐ際に上に引っ張られたものが重力に従つて落ちていく。

その反動で自然の摂理に逆らい上へ、そして下へ、リズミカルにバ

ウンドある。位置エネルギーと運動エネルギーの交換が収束していく。

その一部始終を見上げていた咲耶の顔は敗北の色に染まっており、その揺れと同じ軌道を描いていた。

前屈みになり極端に布面積の少ない服を外すと、咲耶の自尊心はズタズタに切り裂かれた。

「咲耶さん、こちらをじっと見ていいだうなきったんですか。恥ずかしいのあまり見ないでください」

腕を胸の前で組んで身をよじる。

咲耶は失格していた。試合は始まつてもいなかつた。諦める以前に同じコートにすら立たせてもらえないのである。

なにが、とは言わないが大きいほうがべつたんこの手を引いて桃源郷へと足を踏み入れる。

勇者が探し求めた理想郷の地だ。アルカディア

浴槽のふたを取ると熱を孕む湿気があたりに立ち込めゐる。

夜はまだ肌寒い季節。お風呂場の一人の白い肌を心なしか暖めてくれた。

「まずは掛け湯をしなくてはいけません。こちらへどうぞ」

「う、うむ。そ、そつとじやぞ。そつとやらんじやぞ。よーな

「ふふ、わかつていますよ」

つるん、とした体の、つるん、とした肌に生暖かいものがかけられていいく。

「 はあ「うん。あ、あ」

「はい我慢できましたね。次は反対側ですのでぐるっと回つてくれだ
れー」

言われたとおり薄い体を回れ右させるべつたん。もちろんなにが、
とは言わないが。

滝のような掛け湯が終わつた。今度は美弥の体にお湯が掛けられる。
天界の湖や下界の林もなんのその。山を越え、谷を越え、冷えた体
を温める。

「それでは入りましょう」

美弥は咲耶の小さな手をとり大海へと優しく導く。

すらりと長い脚が片方だけ優しくそつと差し入れられる。

続いて短く細い脚がおつかなびつくり海に沈められるが、海底まで
届かない。

波打ち際で尻餅をついてしまつ咲耶。

美弥はそれに呑わせる様にして海沿いに腰を下す。

その姿はまるで鳥取砂丘と松島であった。

一つの全く違う大和風景が一つの海岸線に姿を見せたのだ！

松島には豊かな自然が広がりたわわに実った果実がある。そこには桃やメロン、イチゴが実っている。

一方の鳥取砂丘には、なにも無い。

鳥取砂丘といわれている所は実はそんなに広くない。小さいのだ。さらには「砂丘」というだけあって一応の起伏もちゃんとある。よかつたね。もつといえば長芋なんかは有名な特産品だつたりする。

砂丘の畑に行けば長芋が埋まっているんですよ。長芋が、砂丘に、埋ま。

松島は砂丘の手を取つてゆつくつと湯船に浸かる。

目を閉じてじっと耐える咲耶を美弥は両手で優しく包みこむ。

「咲耶さん、そんなに怖がらないでください。私がついていますよ」

素直に腕の中に抱かれた彼女はここに来てようやく落ちつけた気がした。

全身を包む暖かな流れに身を任せる。

「つむ、風呂というのも存外悪くないの。美弥がどうしてもと言つ
ならまた入つてやらんでもないぞ」

「はい、その時はおねがいします」

同衾（前書き）

兄さん、大好きですよ。

俺と美弥は揉めていた。

いや、正確には咲耶と美弥が揉めていた。

話は十分ほど前に溯る。

俺は風呂で一日の汗と疲れを洗い流す。糺余曲折あつて俺が一人の後に風呂に入る事になった。

俺としては咲耶と裸と裸のお付合いをして moyかつたのだが、世の中そんなに甘くない。

現実は厳しいのだ。

いつもより少しお湯の減つていた浴槽に悔しさを覚えつつ手早く体を洗う。

リビングへと戻ってきた。

「おかえりなさい、兄さん。お湯加減はいかがでしたか？いつもより残ってるお湯が少なかつたかもしれません……。大丈夫でしたか？」

「悲しみの涙と深い絶望に肩までゅうくじと漫ることができたよ

「……？」

美弥はいつもの白い布地に赤いチェックの柄が入った、特徴が無いことが特徴のパジャマ。

だが良く出来た妹が着たパジャマというの、それだけで理屈ではない超自然的な価値がでてくる物なのである。

それはそうと、もう一方のちびっ子が着ているあれはなんだ？

ぶかぶかのYシャツ、だと……。似合はずぎだら……。

まさか美弥がこのようなチョイスをしてくるとは。よく解つていらっしゃるじゃないですか。

リビングのソファーで大人しく座つて、いる咲耶のしつとつと流れる銀の絹糸のような髪を美弥は櫛で丁寧に紡いでいく。

春の夜陰に少しだけひんやりとした静かな空氣の中、髪から伝わる美弥の暖かさを感じてか咲耶はこくつこくと舟をこごこごる。

そんな一人を横目に見て、冷蔵庫からよく冷えたじゅわじゅわ泡の出ているアレを取りだし、風呂あがりの熱く火照った体に流しこんだ。

「 んぐ んぐ ンふはあー 」

弾けるような快感がのど奥を突きぬけて暴れまわる。生き返るときはまさにこのことだ。

「もつ兄さんったら、だらしないです。もつ少し上品に飲んでください」

「ショがないですね、といった感じの我が妹の意見はもつともありますが、こうのはなかなか止められない。

兄妹の二つのやつとつで皿を覚ましたお姉様は俺の姿を確認すると、こち近よつてきて体こしなを作り言つた。

「じゅじゅあ信弥よ。高貴なるわらわの美しくも艶やかなこの姿は」

「う、ふんとか、あはんとかされても正直反応に困る。もつ少し大

人になつてから……ん?

咲耶が前かがみになり、頭部とヒザに手を当てながら胸部の洗濯板を強調していた時。

「氣づいてしまつた。

ぶかぶかの白い聖衣の襟元えりもとからのぞく小さな桜の花びらを。

「あ、おおお……。か、かわいいんじやないかな……」

「むへへん。そーではない。わらわがかわゆいのは解つあつてある體は言つてない。声がちょっとだけ上ずつた氣もある。

「むへへん。そーではない。わらわがかわゆいのは解つあつてある

のじや。今は我に「一ふんするのかと聞こておるのだ

「 す、するか。」「一ふんしけりつかな～～

「 おおー、そつかそつか。では思つぞんぶんわいわで楽しむがよいのじや。ほれ、それ、これでどうじや。こんなのもあるだ

のつりでくねくねする咲耶を上から覗きこむよつことばなく、
「ぐわりげなく移動する俺の行動に對して敏感に何かを感じとった
美弥が待つたをかける。

「 咲耶さん。明日は朝から学園に行かなくてはいけないのですから
もう寝ましょつか」

チッ！ と心の中で舌打ちをする俺。れすがよく出来た妹は勘も鋭
い。

「やうか。でわ信弥よ、そなたの床に案内するのじや。わらわもそ
いで寝ましょか」

一瞬何を言われているのか理解できなかつたが……。そつか、そん
なイベントも残つていたんだな。

俺も君とおねんねしたいと心から思つが。別に変な意味じやなくて。

だがな咲耶よ、東條家において物事を決定するのは俺じやないんだ。

「 やうだね、一緒に寝ましょか。ついておいで咲耶」

「「つむー」

「……兄さん？」

いつも誰にでも分け隔てなく向けられる柔らかな微笑み。

人の心の中に入るつと入つていいく、そんな笑顔をしている美弥の、
そんな彼女の目は、笑つていなかつた。

「ウソデス、チョウシニノロマシタ」

「はい。兄さんは冗談が上手いです。咲耶さん、今晚は私と一緒に
寝ましょつね」

「えーー、今しがた一緒に寝るつて約束したのじや」

「ダメです。咲耶さんを兄さんに預けるわけにはいきません」

「いやじやー一緒に寝るのだ」

「いけません。兄さん、いいかげんにしてください」

「何で俺が……」

「元はといえば兄さんが

「信弥と一緒に寝るのじやー」

とまあ、こんな具合だ。

俺は「うみえて聞き分けがいい。ちゃんと判つていた。

す」しだけ調子に乗つてしまつたが、もう許してほしい。

これ以上美弥の心象を悪くするとなにが起るか判つたものじゃない。

俺だけ朝「はん出でないとか普通にあつそつで怖い。

「咲耶、今日は美弥と一緒に寝るんだ」

「むーーーん。信弥までそつぱつのか」

「兄さんもそつぱつであります。行きますよ、咲耶さん」

「んむう」

しぶしぶといった様子で咲耶はドナドナをれてこつた。

美弥のあの様子から察するに、あしたの朝飯は無事であろう。口は災いの元とはよく言つたものだ。

しかし桜の花びらが見えてしまつたのは役得だつたな。下着がないのは仕方ないが。

……ん？ 上は無かつたのは確認したが下はどうだつたんだ？
も、もしかして……。

な、なんてな～。まさかそんなことがあるわけが、ない、よ
な？

さて……、俺もそろそろ寝ようか。

今田はいろいろあった。

魔王がいきなり現れて、俺の「先祖様が勇者で、世界征服だ。
親父とお袋は急に海外旅行に行つたし、臨死体験もしたつけな。あれ
は衝撃的だつた。

だがこんな日常も悪くない。

咲耶とならこれからも楽しくやつていけるだろ。たぶん……。

先に階段を上がつた一人の後を追いかけるように二階の浴室へと向
かう。

そこには俺の部屋の前には美弥が仁王立ちしていた。

その表情は闇に融けこむようにして窺い知ることは出来ない。
うかが

「兄さん。いったいあればどういう事なんでしょうか。納得のいく
説明をおねがいします……」

美弥が指差す方向は二階の物置。

はて……、あそこには和室の荷物を運んだだけだったが。

「なが
促されるまま物置の中を覗き込むと、ダンボールの中身がそこらじ
ゅうに散乱してそれはもうひどい有様だった。

「たしかに和室の荷物整理をおねがいしました。でもこんなに乱暴
に扱うなんて見損ないましたよ、兄さん」

「え……、でも確かにしつかりと積み上げておいたはずなのに」

そこまで言つてから俺は嫌な予感がして、床に転がっている中身が
まだ出ていないダンボールの重さを確認してみた。

「 ッ！」

重い。

いやいや、本来ならそれが正常なのだがこれは魔王の御業によつて
軽くなつたはずじゃ。

俺と咲耶はただ運ぶだけではつまらないので、途中からは箱を投げ
て遊びながら運んだり、物置の中でどれだけ高く積めるか咲耶と競
いあつたりした。

もちろん身長のある俺の圧勝だったが。いや、今はそんなことより
この惨事がいつにいつことなのか。

そこで俺は、美弥の部屋から顔だけ出してこちらを覗いている共犯
者を見つけた。

「すまんの信弥よ。あれは時がくれば元に戻るのじゃが、言ふ忘れておつたわ」

パタン。

言い終わると、静かに部屋のドアを閉め、それっきりだった。

裏切りやがった……。

さすが魔王だ。

こんなに汚い奴だとは思わなかつた。

だがうちの妹にそんな事情は全く関係ない。

「咲耶さんも悪いかもしませんが、これはちゃんと確認しなかつた兄さんの責任です。後片付けが終わるまで寝てはいけませんよー! いいですね、兄さん」

「え、あ、あの、ちよ……」

言い訳する間もなく部屋に戻つた美弥。その表情は最後まで判らなかつた。

明日の朝飯、俺の分はあるのかな……。

咲耶さんは私のベットの中で丸くなつていきました。

私もその可愛い魔王さんの隣にお邪魔します。

彼女はじつとして動かせん。

めつと怒りがれると黙つてこらのかもしれませんね。

でも私はじつえていた笑いをこれ以上隠し切れませんでした。

「つふふふ、あはは」

彼女はよつやけにけりを振り返り、私の顔色をつかがいます。

笑つてゐる私を見て、咲耶さんは正直に話してくれました。

「あれはわらわが信弥と一緒にやつたことなのだ。わらわも悪かつたのだ」

半分泣きながら告白する彼女が可愛いでつこつゝ頭を撫でてしまします。

「話していただきありがとうございます。初めから判つていましたよ。でも兄さんにはお仕置きが必要なんです。これに懲りて反省するといふんです」

私が怒つてなことかが判ると、彼女はお布団の中をもぐもぐとこちらに移動してきました。

抱きしめられてしまいます。

「……暖かい。じつしてると両手を黙つて出すのじや。美弥よ、今日はずつといつしてこてもよいか？」

「はい。わたしもなんだか懐かしい感じがします。今日はこつぱこ甘えてください」

「「ウムハ……」」

私の胸の中で眠る小さな魔王さん。

可愛らしこ寝顔をこかに回すかすやかと寝入ってしましました。

私もここの寝顔を見ていると安心してしまいます。

物置からせ兄さん後の片付けの音がわずかに聞こえます。

あれだけ散らかっていたのにせんせん音がしてこないのは、兄さんは気が使つてくれているからなのでしょう。

少し可愛らつなことをしてしまいましたが、兄さんは甘い顔をするとすぐに付け上がりてしまいますからこのくらいが丁度いいのかもしれません。

なんだかんだ忙こつひ、優しくて素敵な

血縁の兄さんです。

おやすみなさい。兄さん、咲耶さん。

初登校（前書き）

違うぞ、待ってくれ。誤解なんだ、信じてくれ！

俺は朝食を食べている。

それ 자체は「一般的なことかもしない。

だが俺にとっては栄養摂取という名目以上に、美弥様の「機嫌といふかけがえの無いものを大根の漬物と一緒にバリボリと噛み締めていれる。

今日から学園の通常授業が始まる。

いつもは憂鬱だった毎日が、長い休みが開ける頃には楽しみになってしまふから不思議だ。

「咲耶は今日から学園に通うんだ。これからどうするんだ?」

「秦宮先生から連絡を頂いています。いろいろ準備があるそうなので、少し早めに学園にいらっしゃる事です」

「学園とは何をするところなのじや? わらわにも教えてたもれ」

もつともな意見を言つ咲耶。

「みんなで集まつて勉強するところかな。他には友達と飯を食べたり遊んだり」

「これ説明しづつと難しいもので、これ以上の言葉が出てこない。

「なんと、信弥たちは貴族だったのじゃな。道理でこんなに高い物が出てくるはずじゃ。じゃが手伝いの者の姿を見かけぬが雇つてはおらぬのか？」

「ん？」

さすがに大昔の魔王様と現代っ子の俺ではカルチャーギャップがあるのだろう。彼女の言つてゐる意味がよく判らない。

困惑氣味の俺に出来た妹が助け舟を出してくれた。

「私達は貴族なんかではありませんよ。学園には大勢の方が通つていらつしゃるので、特別なことではないんです。ですので、お手伝いさんも居ません」

なんとなく納得したような咲耶。今は朝食に夢中なのか、それ以上深く追求しては来なかつた。

俺と咲耶は先に家を出る。

咲耶は綺麗になつた巫女服に身を包み上機嫌だ。

最後に戸締りと火の元の確認をしてきた美弥が出てくる。

「お一人ともおませしました。では学園へ行きましょうか」

学園へと向かう道のりで、同じ方向へとむかう方々は咲耶の愛くるしい姿に目を奪われていた。

長い銀色の髪を揺らして歩く彼女は注目の的だ。

朱と白の巫女服もかなり目立つておりコスプレと思われても仕方ないだろ？

早い時間に出てきて正解だつた。

そんはことを知つて知らずか。道中相変わらずなにかにつけてべたべたしてくる咲耶だつたが、人通りが多くなると急に大人しくなつてくれた。

学園に入るなり、そのまま一直線に職員室に滑り込む。

二年学年副主任である秦宮真理子先生が俺たちを迎い入れてくれた。

「よく来たね。それにしても結構目立つてたじやないか。よ、有名人！」

「やめてください。教室に行つたらなんて言われるか……」

「あはははははっ。でもまあこんなに小さくて可愛い子を連れているんだから少しきらい我慢しなさいな。じゃ早速用意してある制服に着替えてもらおうかな。美弥君も手伝つてくれたまえ」

職員室の中に併設された、給湯室と書かれたプレートが飾られている個室に一人を案内する秦宮先生。

当然のようすに三人の後を付いていく俺。

秦宮先生と美弥が一緒に振り返り、ジト目で呆れたよつて言つた。

「あんたね、わつきの話を聞いてなかたのかい？ まつたくこんなことじや美弥くんも相当苦労させられてるんだね」

「やうなんですよ先生。兄さんのデリカシーの無さには困つてしまします。いいですか兄さん、私達はこれから咲耶さんを制服に着替えさせるのですよ。そこに兄さんが居ると着替えさせることが出来ないじゃないですか」

「そうこうことだ。ここはもういいから、あんたは先に教室にでも行つて大人しく授業の予習でもしてな」

放り出されるようにして追に出されてしまった。

これ以上ことじまつても仕方ないので、重い足取りで教室へと向かつ。

そして案の定、こんなに早く来ている物好きのクラスメイトたちに質問攻めにされた。

「ねえ東條君あのちつさくて可愛い子は誰なの？」「あの巫女服はコスプレなの？」「おい東條てめえ今朝のあれは何だ」「もう一方のスタイルいい子も東條君のコレなの？」「え、なにそれ二股？」
「やだ、東條君さいてー」「爆発しろ」「すつ」とい可愛いかつたよね」「あの子は知り合い？」「東條君つて大人しそうな顔して意外とやることはやつてゐるのね」「あの子紹介してよ」

ひどい言つようである。

「とりあえず一緒にいた妹のこととは言つておいたが、咲耶のこととは言葉を濁してはぐらかした。

「神様です。いいえ、国際的には魔王なんです」なんて言つてみる。

「この場ここ全員を白はれて黙らせる自信がある。

だがこれから学園生活のことを考えると上策とは言えない。

それに咲耶をどのように扱うにするのかを全く聞かされてなかつたのだ。

下手なことを言つて話が食い違つてもしたら後々面倒だからいつもしかなかつたのだ。

最も肝心な俺と咲耶の関係をはぐらかしながら適當な返事ばかりする俺に、クラスメイトはますます質問を浴びせ続ける。

一番後ろの席だった俺の周りには容赦なく人が詰め寄せていた。

ほとほと困り果てていたときに、救いの女神が手を差し伸べた。

「みんな、東條君が困つてゐるじゃない。それくらいにしてあげましょ」

大人しそうでいながら凛とした瞳ではつきりと訴える彼女は、腰まである長い髪を揺らしながら入ごみを掻き分けて進んで来る。

童顔ではあるが清楚な感じのする整つた顔をやや歪ませて、よつや

く俺の座っている机の前までじりにかしてやつてきた。

その動作の一つ一つに気品が感じられた。

そのままの勢いであたりを一睨み利かせる。

すりつと伸びた腕を払つよつと動かしてから、改めて言い放つた。

「もうすぐエ Rが始まつますよ。畠さんは席に着いてください。はい、散つて、散つて!」

彼女が俺の周りに群がる生徒の塊を徐々に追い払つてくれた。

まつすぐ切り揃えられた長い髪が田の前でゆりゆりと揺れて、ほのかに甘い匂いがする。

そうだ、彼女はクラス委員長だ。

あれは今でもはつきりと思い出すことが出来る……。

じうじてこんな面倒くさいものを一番最初に決めなくてはいけないのかと、誰もが疑問に思うクラス委員長。

皆が下を向いてまるでお通やなにかのよつた空氣の中にあって、颯爽と手を上げて立ちあがり立候補した。

俺は無理。私は無理。誰かやれよ。

その勇氣ある行動に、静まり返ってきた教室はとたんに色めき立つ。

救世主が現れたぞ！

満場一致で承認された彼女の戴冠たいかんは、やかましいほどに鳴り止まぬ拍手でもって祝福された。

あえていうなら、俺などではなく彼女こそが勇者にふさわしい人物なのである。

当時の様子をT・S君が振り返ってくれた。

「もうだめかと思いました。誰もが諦めそのまま時間ぎりぎりになるまで座られた拳句、悪魔のクジによつて約1／40の確率でこの一年を先生方に奴隸のようにこき使われ、面倒ごとをまる投げされて、あだ名は強制的に『委員長』になる。そう覚悟しました。ええ、もちろん私もそう思つっていましたとも。でもそんな時に女神……。そうですとも、まさに女神です！ 女神がこの絶望の暗闇の中から我々を救い出してくれたのです！ 私達は盛大な拍手で彼女を讃えました。長く美しい黒髪を伴つて壇上へと上がる彼女からは後光が見えたような気さえします。あまりの美貌と気高い品格に目が離せなかつたですね。彼女のおかげで他の委員決めも時間内に滞りなく終えることが出来きましたよ。そのあとの妹との待ち合わせにも遅れずに済んで、彼女には本当に感謝しています」

「んな声もあるくらいだ。

名前は覚えてるべ。

戴冠式のときに調子に乗つた男子どもが彼女の名前を連呼していた。

当の本人は顔を真っ赤にしながら必死に「止めてっ！」と叫んでいたが。

たしか 『しおり』 だつたかな。

あれだけあつた人垣が俺の周りからすっかり無くなつたのを確認するど、例の女神が話しかけてきた。

「大丈夫だった？ 東條君。みんなはすぐ調子に乗るんだから、まったく困つたものよね」

「ありがとう。おかげで助かつたよ、しおりさん」

「あら、話したことも無いのに『しおりさん』だなんて……、ずいぶんと馴れ馴れしいのね。もしかして女の子の扱いに慣れているとか？ さつきの一股つてのも案外本当なのかもしないわね」

「ごめん……確かにその通りだったかも。でも苗字を思い出せなかつたんだ」

「みんな『委員長』って言つてるのだから、あなたもそう呼んでかまわないのよ？ やっぱり女の敵なのね。注意しどとかなくちゃいけないわ」

からかいつにして言つ彼女に降参するいつにして手を上げる。

そんな様子の俺を楽しそうに観察していた彼女は、どきりとするような怪しい表情を浮かべた顔を急に俺の口と鼻の先まで近づけて、俺にだけ聞こえるような声で囁いた。

「冗談よ、あなたとはもつと親しくなりたいと思つてゐるの。……本当によ？ だつてあの魔王様のことだつてあるじゃない？」

「 ッ！」

ゆつくりと、顔を離した彼女は嘲笑あざわらいうかのよつたな顔とクロノの香りを残して自分の席へと戻つてこぐ。

唐突に言われた『魔王』という言葉と残り香にドキドキしてしまい、黒く長い髪が揺れている後姿に声を掛けることができなかつた。

そこにタイミングよく先生が教室へと入つてきてしまい、彼女に話を聞くタイミングを完全に逃してしまつ。

「どうこつ」とだらう。なぜ彼女は咲耶の正体を知つてゐるんだ。

考へても堂々巡りで答えが出るはずも無く、先生の話が頭の右から左に流れしていくだけだつた。

「じゃーみんなお待ちかねの転校生を紹介するわ」

先生の一言で我に返つた。教室には歓声が沸き起つてゐる。

咲耶は俺のクラスに編入するとは聞いていた。無難に転校生といつことだが一体どうなることやら。

「判つたからお前ら落ちつけつて。いいか、彼女は帰国子女で日本のこととはあまりなれていないそつだから、何か分からぬことがあつたら優しく教えてあげるんだぞ」

『彼女』といふ言葉を聞いて、転校生が今朝の少女といふことが確定しますます騒ぎ出す野郎ども。女子もそれに便乗して転校生について話している。

「お前たち、こんなにうるさいこと転校生を呼べないだろ。わざわざ黙りなさい」

その瞬間、ピタリと騒ぎが止んだ。素晴らしい一体感であった。

そんな様子に半ば呆れ気味の先生は、教室のドアの向いに立つてゐるであつた。転校生に向かつて声を掛けた。

「じゃあ玖珂君、入ってきなさい」

そう先生が言い終わると、静かに教室の前の扉が開いた。

開いた。

開いたが……。

真新しい制服に身を包んだ咲耶が登場し、教壇の前までやつてきて、自分の名前を慣れない手つきで黒板に書いて、よろしくと微笑んでいた。

そつ思つていた。

だがいつまで経つても開いた扉からは誰も現れない。

何事が起きたのかと小さくわざわざ始めた教室。

先生も額に手を当てて困った顔をしながら開きっぱなしのドアの向こつを見ている。

そしてたつぱりと時間をかけてから、ついに銀色の髪の頭だけがドアからこみあつと生えた。

やつぱり咲耶だ。

長い銀髪を垂らしながら、ゆっくりと首だけ出して教室の中を窺う。咲耶は今にも泣き出しそうな顔をしていた。

そして教室の後ろにいる俺の顔を確認すると、なんとも魔王らしからぬ情けない声を出して言つのである。

「ふ、しんやああ～。ひつ、ひつ、しんやああ～」

言つ終わるとドアの向こうに引ひ込んでしまつた。

その様子を目撃したクラスメイト達は言葉を失つてしまつ。

唐突に後ろのドアが開けられ、そこから咲耶が制服の袖で顔を隠しながら俺に向かつて走つてきた。

俺の胸の中に顔をつずめて小さくなる。

そこまではいいのだが、俺の制服で顔から出でる液体を拭くのはやめてほしい。

「そんなわけで見ての通り、玖珂君は少しばかり人見知りのようだな

そういうえば咲耶は人通りが多くなつてからやけに大人しくなつていたな。学園に来る頃には存在 자체が希薄だった氣もする。

思い出してみれば、最初に出会つた時も、秦宮先生に呼び出された時も……。

思い出した。咲耶は内気な性格だったはずだ。

昨日はずつと美弥と三人で一緒に居たから忘れてしまつていたが、咲耶はいじめられて？ 内気な性格になつたのだった。

でもまさかここまで残念なことになつてしまつとは……。

そんな咲耶の頭を撫でてあやしてやつてゐるうちに、ふと気がついた。

クラスメイト全員が突き刺さるような視線をこちらに向けている。

やめて、痛い、痛い。

視線だけで人をここまで攻撃できるのかつ。

客観的に見みれば、今朝一緒に登校してきた銀髪美少女転校生を抱きながら頭を撫でているのだ。気にならない方がどうかしてゐる。

そのとき俺は気づけなかつた。

冷たい目線のクラスメイト達が、本当に言いたかつたことを。

やがて静まり返る教室の中においてクラスメイトの一人が無情にも、

だが的確な表現で俺たちを描写した。

本人は小さく^{つぶ}呟いただけだつたのだろうが、静まり返つた教室において全員の耳に届くには十分な大きさだつた。

「ロココン」

ただ冷たかつただけの空氣^{くうき}が一変して、氷雪を伴つたブリザードとなり俺に襲い掛かる。

違つ！ 断じて違つ！ 俺はそんなんじやないんだ。信じてくれ……。

小さい子と抱き合つてる俺を、委員長のしおりは面白がりしながら見ていた。

信じていたの。」（前書き）

常に味方とは限らない

信じていたの。」

「「」の様子じゃ玖珂の面倒は東條に任せるとしよう。瀬川、席移動してもうつてもいいか？」

「も、もちろんですよ」

隣の席の彼女がうなずく。

ありがとう瀬川さん。ほら、咲耶もお礼を言いなさい

「う、うん。あ、あり、ありが……とお」

「「」めんね瀬川さん。咲耶はちょっと内気な性格で

「「」うん、いいの、ぜんぜん気にしてないよ、じゅ

早口で言つ彼女。

優しい子だ。

そう思つた彼女の去り際の、あの……、汚い物を見るような目は、俺の人生の一页にしつかりと刻み込まれた。

「これで話は終わりだ。お前ら、あまり玖珂をいじめるなよ

HRが終わつてからの咲耶は大人気だった。

咲耶のまわりには人が押し寄せ、矢継ぎ早に質問を浴びせる。

俺たちの間には見えない境界線がある。そこからはずもはみ出さない徹底振りだった。

人だからには、「大丈夫?」とか「何かされたりしてない?」とか、咲耶はすぐ心配されていた。

ロツコーンという言葉が頻繁に飛び交い、虐待とか、犯罪って単語も聞こえてくる。

そ、そんなんじゃ、ないのに……。

彼らが本気で言つてるわけではないと信じたい。

そんな騒動の中心に居る咲耶。

隣の俺が見えなくなる程にクラスメイトに囲まれてるので、助けを求めることが出来ない。

背筋を伸ばしたまま固り、ときおり何かを喋りたそうにしては、また下を向いてしまう。

一言も発せずに居たので、俺への疑惑はさらに深まるばかりだ。

そんな感じで一限の授業開始まで過ごした。

かくして、俺の一年間のあだ名は決まった。

「ロツコーン」だ。

耳を澄ませば聞こえてくる事はあるかもしないが、面と向かって書かなければいけないだらう。

俺が居ない間に、「あのロココノは、あのロコノンが」と、言われ続けるのだ。

ちゅうと変なあだ名が付くだけならいい。

昨日まで親しく話しあっていた吉川君に前原君。クラスの中でも可愛いう姫本さんとも仲良くなることが出来て、「よっしゃー！」って思つてたのに……。

その誰も田線すら合わせてくれない。

去年同じクラスで一緒にいた恭介まで態度がよくなれない。

さすがの俺も、これには心の中で泣いてしまった。

クラスメイトの誤解は徐々に解いていくあるま。

そしてもうひとつ気になる事が。

咲耶の正体を知っていた彼女だ。

だがその疑問は、やつやく一限田の授業で明らかとなつた。

数学の教師が彼女を指名したのだ。

「じゃ」の問題を……。秦宮、やつてみる

「はー」

そう短く答えた彼女。

俺の周りの人垣を崩した時とは別に、すこし控え目な印象だった。

長い髪をなびかせながら、黒板に出て問題を解いてゆく。

ビーツやら天は一物を「えたらしい。

先ほど例題をやつただけの応用問題を簡単に解いてしまった。

はたみやしおつ
秦宮詩織。それが彼女の名前だった。

魔王とは何なのかを教えてくれた秦宮真理子先生と同じ苗字だ。

真理子先生は学年副主任で担任は持つておらず、俺のクラスの英語の授業を受け持っている。

しかも学園で最も人気のある（男子限定）、大人の魅力あふれるセクシーな先生だ。

先生と同じ苗字なら姉妹か、あるいはお子さんか。

あんな若さと美貌で俺と同じ年齢のお子さんが居るとは信じられない。

くわだが俺の隣には、先ほどH.R.後の尋問からずっと固まっている魔王さ

王がいる。

ありえないことなど、何ひとつとしてない。

もしかしたら秦宮先生自身が魔物つて可能性も……。

美しいところにおいてなり、ありえなくも無い話だ。

でもさすがにそれは考えすぎたろう。

仮にそりだとしたならば、秦宮詩織も魔物といつてになるではな
いか。

昨日の口ぶりからするに、先生は人間であると思つ。

その推測は後に正しいと知ることになるのだが、それは別の話だ。

昼休みに携帯で呼び出されていた俺は、桜の大樹のさらに奥、普段
は人が来ないところで美弥と落ち合つた。

四限が終わると同時に、放心する咲耶の腕をここまで引っ張つてき
た。

途中からは半分抱きかかえるよつた形になつていたと思つ。

「兄さんが『一股して』とか、『幼女を家で飼つてる』とか、
『美女をはぐらせて』とか。すゞい尾ひれがついている噂が、一
年生の教室まで来ていましたよ。おそらくこの分だと学校中に……」

ある程度は仕方ないと思つてはいたが、あまりにもひどい。

「美弥はお兄ちゃんの」と、信じてゐるよな？」

「はい、もううんですか」

いつもの笑顔で答えてくれた。

田中がと笑つてゐる。

昨日の夜のことは美弥の中では無かつた」とこしてもらひえたりしき。

「ちゃんと説明してくれた？」

「それは……、わたしも新しい学校で大事な時期ですので、それで、あの、その……」

「…………」

良く出来た妹は肩に下がっていた鞄よつ、袋を3つ取り出した。

「ああ咲耶さん、お腹がすいてるでしょう。お弁当を作つてきましたので、みんなでいただきましょうか」

勇者としてー（前書き）

妹の事となると人が変わららしい

勇者として…

美弥が作ってくれたお弁当はおこしー。

でも咲耶はそれどころではないらしい。

俺たちと三人きりでも、あの弾けるような元気な姿を見せてくれなかつた。

美弥は「あ～～ん」して咲耶に食べさせてはいたが、昨晩のよう嬉々として飛びついては来なかつた。

口に運ばれてきた物を機械的に喉の奥へ。

もぐもぐ……。もぐもぐ……。

「む、むひ。帰り、たいのじや……。学園とせ、かくも恐ろしい所なのじや……」

「転校初日ですからね。仕方ないのかもしません」

「わづだなあ。今日、明日の辛抱や。そのうちは落ち着いてくるから

そんな俺の意見にしょんとじつしまわ」。

「…………」

可愛い転校生を見て興奮するのは判るが、元気の無い咲耶の気持ちにも気づいてあげてほしかつた。

後、よかつたら俺の性癖とかもついでに……。

「咲耶さん、もうお弁当はよいのですか?」

「今は食事が喉を通りぬのじや。こんなに重い弁当を……。すまんの、美弥」

手で硬く握り締められていたスカートの裾。すそ

その場所には下ろしたての制服であるにも関わらず、くつさりとした皺が作られていた。

なんだか少しかわいそうになってきた。

「兄さん。」いのちは兄さんの出番じゃないでしょ? 期待していますよ

そう妹に言われるまでも無く、どうにかしなくてはいけないか……。

人が少なくなるように時間ぎりぎりまで桜の広場の奥にいた。

咲耶の手を引いて教室へと帰る。終始黙り込んで俯いたまま。

幼女を拉致して時間一杯連れまわしてから教室へ戻った俺を、クラスマイトは怪訝な表情でもつて出迎える。

うつ……。

一瞬だがたじろいでしまつ。

右手の中の小さな手が、強く握られたのを感じられた。

俺は先ほどの決意を新たにする。

俺は教室に凄みを利かせてから切り出した。

「みんな、聞いてくれ！」

教室中の関心がこちらに集まっていた。

「転校生である咲耶と仲良くしてくれることは、素直に嬉しいと思う。だけど咲耶は人付き合いがあまり得意ではないんだ。だから、咲耶がこの学園に慣れるまでそつとしておいてもらえないだろうか。たのむっ！」

俺は気づいたら頭を下げていた。右手から伝わってくる熱い感触。

不器用だったかもしれないが、今の気持ちを正直にぶつけたつもりだった。

突然の事態に静まり返る教室。

そんな困惑気味の教室において、一人が生徒の群れ中から俺たちの前に出てきた。

委員長である秦宮詩織がまたもや助けになつてくれたのだ。

「確かに私達も玖珂さんのことを考えずに詰め寄つたりして困らせてしまつていたわ。その点においては悪かつたかもしれない。」

クラスメイトを説き伏せるよひ話しが続ける。

「アーニで、じうこひのはじうでじょひ。玖珂さん、実はまだ自己紹介を済ませてはいなこ。下の名前を知らない子も多いわ。幸い授業前で全員居るみたいだし……、この場で自己紹介をしていただいと、私達からの質問はいつたんお終い。ここひことでじうでじょひか」

重い空氣の中、じの提案に異を唱える者は居なかつた。

咲耶は俺の手から離れて、血ら一歩、前に進み出た。

「天のしり。……く、くが。くがさくや。く、玖珂咲耶、で、です……」

下を向きながらだつたが、教室全体に十分聞こえる声で咲耶が自己紹介した。

「咲耶、もつひひとつ咲つことがあるだろ」

そんな俺の言葉に振り返りはせず、やけくそ氣味に言つた。といつか怒鳴つた。

「よ、よひくおねがいじますー。」

元から下っていた頭をさりに下げて声を張り上げたのだった。

突然の大声に度肝を抜かれるクラスメイト達。

パチパチパチ。

秦富詩織が咲耶の不恰好な自己紹介に対して拍手を送る。

それに続くよろこびにして教室中からも盛大な拍手が沸き起つた。

自己紹介を終えた咲耶は俺の背中に隠れてしまつ。

その刹那に見えた彼女の顔は、決して悲しい表情ではなかつた。

いつもして咲耶は正式にこのクラスの一員として認められたのだった。

つかの間の平和が訪れた。

彼女には後でお礼を言わなくてはいけないだろう。

正直いつて頭を下した時の、あの微妙な空氣は、俺一人ではどうするにも出来なかつたはずだ。

極一部では、事実が露呈しないように牽制けんせいしてきたとか、転校生を
独り占めだとか、そういう意見もあるようだ。

だが全体的にみれば俺の評価もわずかながらよい方向に傾いた……、

気もする。

放課後。誰も居なくなつた俺の教室に美弥がやつて來た。

「ミニーやーつ！」

ちよつとだけ明るさを取り戻した咲耶が美弥に飛びついて出迎えた。

「よい子にしていましたか？」咲耶さん

うむ、わらわほいりでもよニ子なのじさじ

抱きかかえたままその場でぐるぐると回転している。

やはり咲耶には笑顔が似合っていた。

「あつた噂が、どうやら
それにして元さん、あの後に何を言ったのですか？」
「あれだけ

やめてくれよ。怖くて聞きたくない……

「うふふ。恥ずかしがつちゃつて……。やつぱり、兄さんは私の兄さんですね」

「うむ。あのときの信弥はかつこよかつたのだ。わらわのために

L

そういうのは柄じゃないのであまり持てはめやしないでほしい。

逃げるよつこして窓の外に田をやつた。

最後の授業がおわつてから結構な時間が経つたが、いまだ下校する生徒達がちらほら見受けられる。

「まだ下校する方がこりつしゃこりますね」

「咲耶が慣れるまでは人が少なくなつてから帰つた方がいいからな。だけど今は部活の部員獲得競争が激化してるから、しばらくはこんな感じなんじやないかな」

「そうですね。ここへ来る際に、私もたくさん部活から勧誘されてしまい大変でした」

「どんな所から勧誘されたんだ?」

「メジャーな部活はだいたい。どうやらどの運動部もマネージャーさんが足りないみたいでした。頭まで下げられてお願いされたときはどうしようかと困つてしまつました」

「『おねーじやー』とほじつこつものなのだ?」

それは妹がそんじょそこらの娘子ひと線を画す存在だからです。^{かく}

マネージャーが足りないなどと見え透いた嘘で妹とお近づきになつたいのだ。

よべ出来た妹をどこの馬の骨ともわからない奴になど渡せるか!

これからは兄として、しっかりと注意して妹の事を見ておかねば。

「部活といえば、兄さん」

「なんだい妹よ。お兄ちゃんに何か用かな?」

ビニールのミコージカルぱりに訴えかけるように腕を前へと広げ、まゆ毛をキリッとさせて我が妹に問いかけた。

急に変な態度になつた兄を苦笑いでこまかす美弥。

そんな彼女はここに、世界征服の狼煙のろいを上げた。

「ボランティア部、行ってみませんか?」

ボランティア部（前書き）

体と心には、傷が残らないよう注意したから

ボランティア部

うちの魔王は妹によるトラウマもあってか、ボランティアに何か変な幻想を抱かされていたらしく、どうあっても行きたいらしい。

「わりわはほらんていあしたいのだ！ 世界をせーふくするのだー！」

そりゃあつきかない。

帰宅部だった俺が急に部活か。

でも美弥が咲耶に付いていくといふならば、俺も付いていかねばなるまいな。

兄として。いや、勇者として！

咲耶の手を引いて、美弥の先導でボランティア部を団結す。さすが出来のいい妹は準備も万全だ。

昇降口で靴を履きかえ、上履きを抱えて外に出る。

正面玄関よりグランドに沿つて桜の広場と逆の方向へと進み、校舎の陰に隠れるようにして建つてある我が学園の特色のひとつでもある部室棟を見つけた。

主に文科系の部室が入っているこの建物は何年か前に新しくなったらしい。

広くゆったりとした部屋には教室にも付けられてないエアコンまで完備してある。

部活をやっている者にとっては、狭い教室というクロシアムに押し込められて睡魔や抜き打ちテストで攻撃していくクリーチャーならぬティーチャーとの戦いに勝ち続け、死の間際に放つ期末テストといつもメガ○テに生き残った勇者だけがたどり着ける楽園なのである。

当然HPが赤くなってしまった勇者は部活なんてやらせてもりえるわけが無く、放課後にティーチャーの攻撃に耐え続ける田々が待つているのだった。

下駄箱がたくさん並んでいた正面玄関から入った。

靴を変えてから、じぎれいな廊下を進む。

立派なプレートが吊り下げられている部室を次々と横切り、蛇口が五つ並んでいるピカピカな水のみ場を過ぎて、明るく清潔感あふれるトイレを越えて。

どんどん進んで、建物の一一番奥にある非常口へとやってきた。

ギュギッ！

金属がこする嫌な音を響かせた錆びたステンレス製の扉をこじ開ける。

出た先には、赤や緑や黒の、色の分だけ年代を重ねたトタン屋根がある渡り廊下があった。

だんだんと靈行きが怪しくなつて来たな。

「まさか……、この半分朽ちたようなスノーケの先に続いているプレハブ小屋が目的地なのか？」

「はい。今日行われた部活のオリエンテーションの資料にはそうあります」

「秘境の湧き湯へ行く時の感じに似てあるのね」

「ちょっとだけ咲耶が怖がつてゐる氣がする。」

黒ずんだ鉄骨と痛んだクリーム色の壁をしたプレハブ小屋が並ぶ深部。あんまり日のあたりがいいとはいえないその一角。電気はかるうじて通つてこらへし。

「どうぞよろしくみたいですね」

手書きで「ほらんていあぶ」と書かれたプラスチックの白いフレートがぶら下げる。強い風が吹いたら飛ばされそうな感じだ。世の為人の為になることをする前に、まず先にこの部屋をどうにかしたほうがいいと思つた。

意を決して、この秘境の隠れ家の戸口を叩く。

ノックをこじこじ。

すると、中から「えりあれ」と一聲。

つギュ！

「これまた嫌な音を出すドアを開けて中へとお邪魔する。

鬼が出るか蛇が出るか……。

「うやうやしく、そのどちらも間違つていたらしい。

ボランティア部の部室には……、牛さんがいた。

白く清純なブラウスに秘められた柔らかな巨峰。

纏うブレザーの胸元の逆三角形から圧倒的な自ま主張しゆを行つていて。

ワガママなボディーとは対照的に、知的なお姉さんといった印象。

肩まである髪を簡単にまとめたポニーテール。

後ろに持つていけなかつた髪を顔の横からそのまま下へ垂らしていく。

凛々しいお顔にはフチ無しのお洒落なメガネ。

左手には読みかけの本を掲げている。

「よひじわ」

無表情で迎えられてしまった。

「私は一年一、組橋遙香。よろしく。……入部希望？」

「ああ。俺は同じ一年の東條信弥。こっちは妹で一年の美弥。そしてこの後ろに隠れてるのが、今日転校してきた珂珂咲耶。よろしくたのむ、橋さん」

「お久しぶりです橋先輩」

「二人とも、遙香と呼んでくれてかまわない」

なぜだか知り合いの一人。よく出来た妹は交友関係のも広いのかもしない。

冷やかしではないと知ると、手に持った本を置いて話を続ける。

「じゃ遙香。君がこの部の部長なのか？」

「うん、私がボランティア部の部長。君が今学校で噂の口り……いいえ、なんでもない」

何て言われようとしたのか凄く気になる。

「わざわざこんなメンドクサイ部活に入るなんて、Mなの？」

「Hツ？」

「……冗談。歓迎する。まさか本当に希望者が来るなんて。捨てないでおいて正解だつた」

包み隠さずストレートな意見をおっしゃる方なのかもしれない。

教室にあるものと回じタイプではあるが、多少歪んでいる机に身を屈めて「アヤシ」と中を漁り出した。

目的の物を見つけ、やつとといった感じで体を起こした彼女。その躍動感溢れる胸部からは女体の神祕を感じ取った。

「これ、入部希望書」

「いぶんと黄ばんだ紙を三枚差し出される。

「（）は去年までは部だったの。といつても、卒業した先輩方が横にある部室棟の部屋を使いたいがために作ったような部活らしかったけど」

それでのブレーントか……。

「その部活を私がもらつたまではよかつたのだけど、部屋が足りりといつ理由であつちを追い出されてしまった」

「やうだつたのか。ちなみに顧問の先生とかは居るのか？」

「秦富真理子先生。一年の英語は全クラス担当していると思う

今まで黙つていた咲耶が突然割つて入つて遙香に声を掛けた。

「おぬしも勇者なのか？」

「やうじつあなたは魔王」

一瞬、鋭い視線が交錯する。

咲耶は言つだけ言つて、いつもの調子で俺の制服をぐいぐいやつ始めた。

秦富詩織といい橋遙香といい、情報化社会の現代において魔物は結構ポピュラーな存在だったりするのか。

「なぜ咲耶の正体を知つてるんだ？ そもそもこの部活は何をするところなんだ」

「あなた達になら、言つてもいいかな」

相も変わらず抑揚の無い声で続けた。

「学園内外のゴミ拾いや行事に駆り出されたり。地域のお祭りのお手伝いとかの奉仕活動。いわゆるタダ働き。魔物退治なんかもたまに」

「へえー。結構まともな活動をやつてるんだな。……ん？ 最後に妙な言葉を聞いたような」

「タダ働き？ やつぱり労働の対価って必要だと私も思つ

「いや、やつけじやなくて」

「奉仕活動なんてものは田舎満足型の方々にやらせておけばいいと思つ。新しい部活発足の審査は結構厳しいらしくて、この部を乗つ取つたんだけど。もう少し考えればよかつた」

「いや、ちがへじ。てかサリコと怖こじと誰わないで……」

「確かにちょっと強引だったかもしけないけど、実際の活動が伴わ
ないような部を陥れるのに、何のためらにも無かつたわ」

「も、もつそれ以上聞きたくない…………」

「じゃあ、魔物退治?」

首を「ぐぐぐ」と動かす。

「知性も持たないようなのが常世から迷い込んでくることがある。
それを退治する、といふかそれが主な仕事、……になつてほしい。
意志がある魔物のほとんどは友好的だし、話したらちやんと判つて
くれる」

非常に衝撃的なことを聞かれてしました。退治と聞いて思わず尻込
みしてしまつ。

「ぐぐぐ、やつぱり入部、やめる?」

なんとなく危険な香りが漂い始めた空氣の中、恐れを知らぬ我らが
魔王は、

「やひひん、ほりとてこあするのじゃ」

やつぱりかに面面あるのであつた。

「私はこれ、秦宮先生に出してこくから今日は帰つてもこよ」

上手く書けりうとこひ逆に不揃いになつてしまつたものと、丸みを帯びながらもバランスよく一筆に書かれてゐるものと、//////ズがのた打ち回つたようなもの。

三枚の入部希望書をひらひらひらかへて書つた。

「あとこれ。私の連絡先だから」

そういう残して、校舎へと消えていった。

手渡された小さな紙。〇〇〇〇から始まる番号とメールアドレスだつた。

遙香の後姿が見えなくなるまで見廻けた俺達も家路へと向かう。

「咲耶さん、学園は楽しかつたですか？」

「ひむ、たまにならひうのも悪くなこの」

「何言ひてゐるんだ。畠田から畠田行くんだぞ？」

「な、なぬ……？」

田が点になつてしまつた咲耶だが、

「し、信弥と美弥が一緒なひが、考えてやうとこじともない、かのあ？」

先生が優しく教えて、あ・げ・る

秦宮姉妹の姉

昨日に引き続き今日も、嫌がる魔王を連れて学園へと向かう。

巫女服の時よりは目立つてはいないが相変わらずの有名入っぷりで、力チコチな咲耶の手を引いている俺への注目もひとしおだ。

朝の教室においては質問攻めことば無かつた。

昨日の一件でみんな理解してくれたらしい。

たまに女子が隣に居る俺をガン無視して咲耶に一言挨拶をしてくれる。

「テレながら上目使いで小さく『…………おはよう』と言つて咲耶に彼女達はメロメロだ。」

しかしながら、廊下からこちらを覗く顔が多いこと多いこと。

咲耶担当なのだろうが、人が集まつて異様な雰囲気だ。

そんな彼らもチャイムが鳴ると同時に自分達の教室へ帰っていく。

「今朝は先生がいらっしゃいません。なので、出席だけ私が取ります。連絡事項は昨日言われた通りで変更はありません。忘れないでください」

クラス委員長である秦宮詩織はたみやしおりが先生の変わりに出席を取っていく。

早速、『委員長』という呪いが彼女を縛り付けている。

だが秦宮詩織の人望もたいしたもので、一日ですっかりクラスの中 心人物となっていた彼女によつてスムーズに出席が取られていく。

根は眞面目なのが、与えられた仕事をしつかりとこなしている。また、楽しんで仕事してゐるようなので仕切り屋タイプなのかもしけない。

そして四限の英語の時間がやつてきた。

「ツツ、ツツ、ツツ

誰も居ない廊下からヒールが響く音が近づき、この教室の前で止まつた。

開け放つたドアを後ろ手で閉めて、堂々とした面持ちで前へ。

純白のYシャツに漆黒のベスト、真紅のタイトミニから生足を晒して、その淫魔はやつてきた。

持つていた教材を教卓の上にバサリと放り投げる。

背を向けて、チョークを拾い上げ、黒板に押し当てる。

カツ！

筆記体で滑らかな文字を綴り終えると、持つたチョークを打ち捨て

る。

こちらに向きなおり、空いた手をわざわざ胸の下で組んで絶景の双丘を見せ付けてきた。

教壇の一段高い所から品定めするかのように鋭い視線で全体を見渡してから、

「知っている生徒も多いと思うが……。一年学年副主任で、この学年の英語を担当している秦富真理子だ。お前達、あんまり面倒事は起こすんじやないよ。ちなみに、質問は受け付けない。じゃ授業を始めるからね」

横暴な自己紹介だった。

男子生徒は肉体も精神も唯我独尊な彼女に惚けたように一拳手一投足を観察している。

女子生徒はテキる大人の女性に憧れの眼差しを向けている。

教科書を読みながら、今夜の獲物を物色するかのように教室を徘徊する淫魔。

いや、違った。

教科書を読みながら、次に指名する生徒を選ぶように教室を歩き回る先生。

スラリと引き締まつた生足を交互に動かし、机の間を行つたり來たり。

近寄ってきた先生に思わず目が行つてしまつ。

服の上からでもハツキリと想像できる括れた腰と天に向かつて突き出された胸のラインは、オトコならば誰でも誘惑されてしまい、否が応でもその存在を強く意識してしまつ。

俺達を魅了してやまない彼女の通り過ぎた道には、本能を惑わせるエレガントなオトナの香りに誘われた男子の視線がその後を追うかのように泳いでいた。

フヨロモンを撒き散らしてリビドーあふれる年頃の男子生徒を誘惑しているようだ。

「こ、この先生は学園に男でも漁りに来ているのだろうか……。

いつまでされたら秦宮真理子先生が実は魔物だという可能性も再検討しなくていけないだろつ。

秦宮詩織は何か我慢できない感じで頭を抱えている。

やはり二人は何かしら関係があるようだ。

「All right. Ms Kuga. Repeat a
fter me.」

なんてことだ。俺が誘惑されていた間に咲耶が指名されてしまった。

そんな俺の不安をよそに、おどおどした様子で立ち上がった彼女は教科書を掲げて読み始めた。

「……い、It is normal to make errors in speaking a foreign language, one learns to speak better by having one's mistakes pointed out and corrected.」

淀みなく読まれた完璧な発音に教室中の視線が咲耶に集中する。

さすがの事態にこの俺も、通り過ぎた生足ではなく隣の魔王を見てしまつた。

そんな視線を受けてか、咲耶は椅子の上で小さく縮こまり、立てた教科書を盾にしながら机に伏せて顔を隠している。

「That's Excellent!! あんた達も私の足ばかり見てないで、Ms Kugayaを見習つて教科書をしつかり見てなさい」

先生の言葉は「もつともな意見ではあるが、これみよがしに生足を目の前で動かす先生も悪い。

といつより、咲耶が英語がペラペラだとは思わなかつた。

誘蛾灯のような先生は、再度教室を練り歩き英文を流暢に読み始める。

当てられた生徒はなぜだか話を聞いていない者が多く、そのたびに同じ質問を先生にさせていた。

呆れたよつに髪をかきあげる先生。

強調されるムネとワキの造形美。

高く掲げられた細い腕から流れる形が、重力と理性に反逆する胸部を際立たせる。

振り下ろされた腕から伝わる振動に震える母性と劣情。

……これ以上ガン見するとあらぬ誤解を受けては困るのでこの辺にしておこう。

とまあ、こんな感じで授業は進んでいった。

キーン、コーン、カーン、コーン！

「おつと、今日の授業はこれで終わりだね。昼休みになるけど、次の時間のことも考えてあまりハメを外しちぎるんじゃないよ」

そう釘を刺して、淫魔は自らの巢に帰つていった。

英語が毎回こじんな調子だとこりこりと我慢出来なくなつてしまつんじやないだらうか。

もんもんとした気持ちを抱えたまま昼食の時間になる。

美弥が昨日と同じ場所で待つてくれているさずだ。

昨日連絡した橘遙香たかねななみも来るらしい。

「ねえロココン。話があるから、ちよつと来なぞこよ」

わざわざまで居心地悪そうにしていた秦宮詩織が、いつのまにか田の前まで来ていて、座っている俺を見下ろしながら言った。

まさか「んなに早く面と向かって言われる」とはなるまい。

教室はその「ロココン」とこの言葉に静まり返り、俺達の行く末を見守つている。

彼女にはお詫びを言わないと想つていたが、やつぱり止めどうかな……。

もおー、恥ずかしいからヤメテよ。お姉ちゃん！

「ねえロリコン。話があるから、ちょっと来なさいよ」

そう上から物申すのは、委員長である秦宮詩織はたみやしおりだ。

クラスメイト達はまさかの凸撃に対して、遠巻きに「ひりを伺つて」いる。

「まさかとは思つが、ロリコンとは俺のことかな？」

「やつよ。いま学園で一番有名なロリコンといえば、アナタのことよ」

これ以上は傷口に塩を塗るだけなので大人しく従おう。

それに彼女とは、昨日の魔王発言からまだ話せずについたのでいい機会だと思う。

だがこれから美弥たちとの昼食の約束もある。

「昼休みは咲耶と一緒に先約が入ってるんだ。先に咲耶だけでも送つてもいいかな」

「かまわないわ。私も東條君と一人だけでお話しがしたいの」

ということで、美弥に短く用件だけ入れたメールを送り、迎えに来てもらひことに。

不安がる咲耶の手を引いて昇降口まで連れて行く。

その後ろからは詩織がぴたりと付いてきていた。

これから島流しにされるかのような咲耶は、俺の顔を見たり下を向いたりもじもじとした様子で不安がっている。

「すいぶんと可愛い仕草だが、ここは心を鬼にしなければいけない。

「ここに居れば美弥がすぐに来てくれるから」

「信弥が、我を置いて、どこかへ行ってしまうのだ……。こ、これからは、もつとよこ子にしてあるから、わ、わらわを捨てないで、ほしいのじや……」

「そんなに大袈裟なことじやないから……。だれも取つて食いはないよ」

頭を撫でてやつてから、咲耶を残しその場を後にする。

隅っこで丸くなり、こちらが見えなくなるまでちらちらと見ている魔王をのままにしておくのは忍びなかつたが、よく出来た妹がすぐに見つけてくれるはずだ。

黙つて詩織の後ろを付いていく。

一年生Hリアである三階のさうじ上。

普段使われない屋上へと続く薄暗い階段へやつてきた。

咲耶は無事に保護されたらしい。

この学園にも一応屋上がある。

ちゃんとフォンスで囲まれてはいるが、当然一般生徒は立ち入り禁止である。

そんな屋上の鍵をどこからともなく取り出した秦富詩織。

鍵を鍵穴にあてがつてから、どこか粋然としない態度で言つ。

「ちょっと、何で私がこんな物持つてるのか気にならないの?」

「え? それはまあ気になるけど……」

「そうでしょうね? 人に吹聴してまわるような話でもないから念のためにね。こういう機会でもないとなかなか来れないのよね」

得意げな感じのはいいが、鍵を差し込もうと暗がりの中で悪戦苦闘している。

カチャリ

鍵が開く音が鳴った。ドアノブを握ったまま振り返り、

「屋上から見る桜もいいものよ」

そう言つて開け放たれたドア。

暗い廊下をうらりかな口差しが照らし、誇りっぽい空気を吹き飛ばすよつに涼しい春の匂いが吹き抜けていった。

四階の高さから見る桜は新鮮で、その大きさを改めて実感した。

パノラマに広がる桜花がカーテンのように樹木を覆い隠しており、舞い上がった花びらが床には散っていた。

「じゃ改めまして、秦富詩織よ。よろしくね東條君。お姉ちゃんのこともあるし『詩織』、なんなら『委員長』って呼んでくれてかまわないわよ?」

「東條信弥だ。詩織さんって呼ばせてもらひよ。」うらやましく、詩織さん。やつぱり秦富先生とは姉妹だったのか

「こんなに引っ張るつもりはなかつたんだけど。あなたがたが面白くつて、ついね」

そう言つてウインクしながら舌を出しておどけてみせる彼女。絵になる光景だった。

「だから魔物のことについては一通りは理解してるわ。あの魔王ちゃんのことで困つたことがあつたら私に相談してちょうだい。女同士だし、力になれることがあると想つ」

「ありがと。そのときは相談させてもらひよ

咲耶の味方が増えるのは心強かつた。

「それにしてもさつさのロリコンは言はずさじやないか？俺のガラスのハートが音を立てて砕け散つたぞ」

「あんた、お姉ちゃんをいやらしげにし田で見てたでしょ。そのお返しよ」

ガン見してたのをしつかりと田撃（たうげき）されていたらし。

「見てたのは俺だけじゃないだろ？」

「やつぱり見てたんじゃない……」

確かにあの光景は田に焼き付けたのにつでも思ひ出せる。

そう、あの大きなムネとすべすべの足。

ドカツ

スネに蹴りが飛んできた。

「な、なにすんだよ。こきなり」

「東條君、今こやりしこーと教えてたでしょ」

「…………」

手をわざこ相手のよつだ。

仕切り直すよつこ咳払いを一つして、

「それにしても秦宮先生は魔物の類か何かなのか？」
俺の予想では
サキュバスだと

「はあ？ 今の台詞お姉ちゃんが聞いたりマジでビックなるかわから
ないわ！」

青い顔をして引いたよつと言つ。立場的にも姉がかなり強いらし
い。

もしかすると俺は大変なことを言つてしまつてゐるのかもしれないな。

「ん？ ちょ、東條君。その理屈から言つと、妹の私も魔物だと思つてゐるの？」

「モードせぬつになつよ」

「東條君が思わなくとも、そつと聞かれているのと同じなのよ。いい
？ 私達はれつきとした人間よ。私はあなたと同じ年で、お姉ちゃん
んとは少し年が離れてるだけよ」

魔物扱いされて怒っているのだろうか。少し強い口調で言われてしまつ。

「わかつたよ。……それにしても今日の秦宮先生は刺激的だつたな
普段からあんな感じなのか？」

姉の話になると懶にしおりしくなつて話し始めぬ。

「私つて今日初めてお姉ちゃんの授業受けたのね。それでお姉ちゃん

んが私のことをからかうためにあんな派手な格好してたんだと思う。いつもはもう少しだけ大人しい服装なんだけど……、私服はあんな感じね。今朝やけにニヤニヤしてると思つてたらいああこことだつたみたい。恥ずかしいつたらないわ」

楽しそうな姉妹の仲らしい。

「内緒だけどね、お姉ちゃん彼氏が出来ないの氣にしてるみたい。『私には仕事があるんだー』とか酔つた勢いで叫んだりとかしちやつて。妹の巣廻田無しに見ても、お姉ちゃんつて若くて、スタイルもよくつて、顔だつていいじゃない？ 信弥君はどうしてだと思つ？」

「んー……。やはり高嶺の花つて感じがするな。完璧すぎておこそれと手が出せないといつか」

素直にそう思つ。あの先生に手を出せる自信のある男はそうまおはまいるまい。

「やっぱり男の人つてそう思つちやうのかしら。教師つて忙しいみたいだし、神社のお仕事もあるから出会いも全然なつてほやいてたわ」

聞いてもいなこことをペラペラとしゃべりだす詩織。

まさかあの秦宮先生にそんな一面があるとは思わなかつた。

だがこの情報はお墓の中まで持つていかなればならぬ類の物だと思つ。

下手にしゃべるとあの先生に何をされるかわかつたものではない。

ヒールで踏まれて、ムチや蠅燭を使って……。

ある意味、褒美と取れなくもないが、その先にどんなお仕置きが待っているか想像してしまつと、思わず背筋が伸びてお尻がキュンとなつてしまつ。

「詩織さんは先生と仲がいいんだな」

「な、なんでそなうなるわけ。わ、私も将来はお姉ちゃんみたいになりたいから、失敗しないように参考にと思って……。って何言わせてるのよー」

自爆気味の詩織は怒つたからなのか恥ずかしかつたからなのか、赤くなつた顔を逸らした。

「そ、そ、昨日お姉ちゃんから聞いた。魔王と一緒にボランティア部に入部したそ、う、じ、や、ない」

「咲耶がどうしてもとこつて聞かなくてな」

「私も紹介してよ。ボランティア部に入つてあげるわ」

「どうしてそ、う、なるんだ？」

「私が入ると五人になるじゃない？」

「橋遙香と、俺と美弥と咲耶と、詩織さんで、5人になるな」

「やつしたり、部として認められて部室棟に移れるかも知れないわよ。」

「そ、それは魅力的だな」

思わず飛びついでしまった。毎日あの嫌な金属音を聞かされると頭がおかしくなりそうだ。

「それに、魔王はちゃんと監視しておかないとね」

「咲耶はそんなに危険だとは思えないが

「やつかしら。心あたりとかは無いの？」

そう言われてしまって、あの一件を思って出してしまつた。

言葉を詰まらせた俺に詩織が見透かしたよつていつわ。

「やつじつわけで、今日の放課後にでもよろしくお願ひね」

「しようがなになあ

その答えに満足しつづけた。彼女。

そう約束して俺達は屋上を後にした。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4202y/>

どうやら、いじめられっ子の魔王が俺と世界征服したいそうです。new
2011年11月24日16時51分発行